

42595

教科書文庫

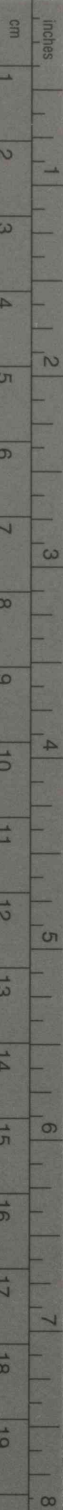
4
810
51-1926
2000301854

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

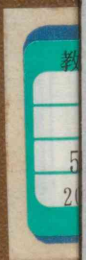
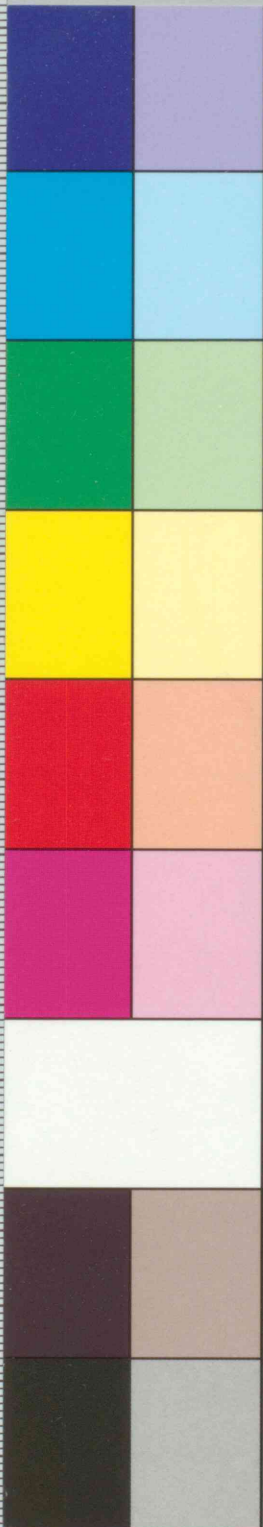
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



編平師田吉
文國範師
 用部一第
 三卷



六課 五課
七課 三課
八課
十課
二十三課
十三課
十六課
十七課
十八課
二十課

資

教科書文庫
4
810
51-1926
2000301854

十分以上
五分以上
五分以下

375.9
Y019

昭和十一年
四月

吉田彌平編

師範國文
第一部用
卷三

東京

光風館藏版

広島大学図書

2000301854

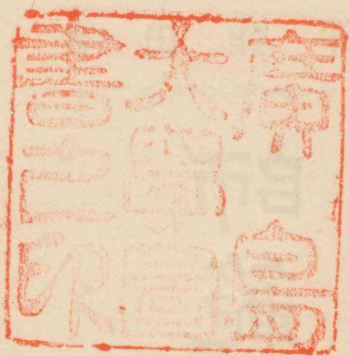


吉田彌平編

師範國文
第一部用
卷三

東京

光風館藏版



師範國文 第一部用 卷三

目次

一 郷土	相馬御風
二 幼兒	小林一茶
三 春宵	夏目漱石
四 田園の春	長塚節
五 蛙	泉鏡花
六 五月の土壤	高村光太郎
七 皇太后宮を悼み奉る	星野恆
八 奈良の舊都	藤岡作太郎

目次

一

九	小泉八雲の舊栖	厨川白村	五
一〇	松江の曉(譯文)	小泉八雲	六
一一	ウェストミンスターとパンテオン	河上肇	七
一二	郭公		七
一三	鍾馗	石川雅望	七
一四	尼法師	福地櫻痴	七
一五	先達	兼好法師	一〇
一六	醉興	兼好法師	一〇
一七	最明寺入道	兼好法師	一四
一八	兒なくらむ		一五
一九	童心	北原白秋	一八
二〇	旅行	山路愛山	二五

二一	汽車に乗りて	上田敏	二三
二二	戯作三昧	芥川龍之介	三五
二三	芳流閣上の奮闘	瀧澤馬琴	三五
二四	橋辨慶	[謠曲]	四二
二五	松の下露	[太平記]	四四
二六	人の問に答ふ	藤田東湖	四五
二七	國ざかひ		一三
二八	長柄堤の訣別	坪内逍遙	一六



師範國文 第一部用卷三

一 郷土

相馬御風

相馬御風
名は昌治
文學者
明治十六年新潟
縣糸魚川町生

郷土といふものゝ人間の心を惹きつける作用は今更ながら不思議なものである。一方に、
「月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり。船の上
に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にし
て旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづ
れの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思止まず。」
と云ひ、或は、

「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん。是天の命なり。」

などと云つてゐた彼の芭蕉でさへ、他方に於ては、

芭蕉肖像五頭



芭蕉の旅装

「代々の賢き人々も故郷は忘れ難きものにおもほえはべるよし、我今は初の老も四年過ぎて、何事につけても昔の懐かしきまゝに、同胞のあまた齡傾きはべるも見捨てがたくて、初冬

の空の打しぐるゝ頃より、雪を重ね霜を経て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと慈愛の昔もかなし

神前
この松のみはへ
せし代や神の秋
桃青

伊陽
伊賀

初の老
四十歳

芭蕉
松尾桃青
俳聖
伊賀上野生
元祿七年(二五四)
歿
年五十一

く、思ふ事のみあまたありて、
故郷や臍の緒に泣く年の暮」
などと云つてゐる。

故郷は蠅まで人をさしにけり。

故郷は西も東もばらの花。

と云つた風に、永い間自分の故郷を呪つて、旅から旅へと漂泊してゐたあの拗ね者の俳諧寺の一茶ですら、晩年には、

これがまあつひのすみかか雪五尺。

などと驚きながらも、其の雪の深い信州柏原の郷里に歸り住んで、そこで一生を終へた。

更にかの近世稀有の歌僧と謂はれる越後の良寛和尚の如きも、二十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあ

良寛

歌僧
越後出雲崎生
天保二年(二四九)
歿
年七十四

一茶

小林彌太郎
俳人
信濃柏原生
文政十年(二四七)
歿
年六十五

一 郷土

思はんと云ふては

予ける

きたらないで、それ以來ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活を續けて靜かな往生を遂げてゐる。

故郷へ行く人あらば

ことづてん、

けふ近江路を

われ越えにきと。

草枕夜ごとにむすぶ

やどりにも、

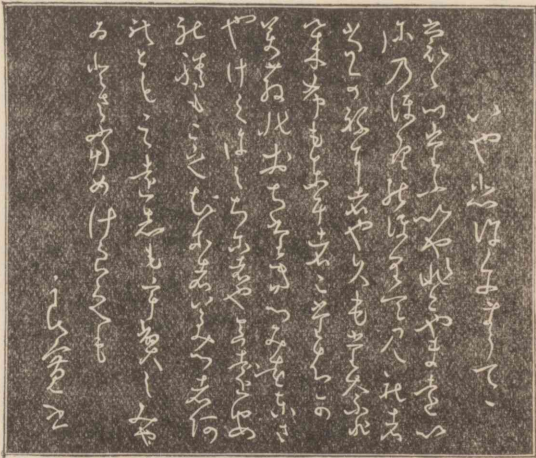
結ぶは同じ、

ふるさとの夢。

などと云ふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふ思の切なるものであつたかを察することが出来る。

彌彦に詣でて
百傳ふ彌彦山を
彌登り登りて見
れば高嶺には八
雲た靡き麓には
木立神さび落ち
たきつ水音さや
けし越路には山
はあれども越路
には水はあれど
も此處をしも宜
し宮居と定めけ
らしも

良寛書



良寛筆蹟

西行
歌僧
俗名佐藤義清
建久元年（八五〇）
寂
年七十三

二十三歳で妻子を振棄て、佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと、

思はんだにもあはれなるべし。

世の中を捨て、捨て得ぬ心地して、

都離れぬ我が身なりけり。

などと歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

かう云つた風に、昔から代表的な漂泊の人々として知られた此等脱俗の人々さへも、不思議に彼等の生れ且育てられた郷土に對しては、しかく切なる愛慕の情を持つて居た。そもく此の郷土の、人間に對して持つてゐる魅力はどこから來るのであらうか。

そもく郷土が私たちの心を惹きつける點は、どう云ふところであるか。その地の自然が、他の何れの土地よりも風景の美に於て優れてゐる爲かと云ふと、必ずしもさうではない。人情が特に他の何れの土地のそれよりも醇美である爲かと云ふに、それも然りとはいへない場合が少なくない。それでは何か特別に自分の生活に都合のいゝ外的條件がある爲かと云ふに、それも必ずしもさうばかりとは云へない。さうかと云つて私たちは、理智的に考へて故郷と云ふものは大切なものだと思ひ、断してから後に、故郷を慕つてゐるとは猶更考へられない。然らば人々は、何故に自分の郷土と云ふものに心を惹かれるのか。それは全く、何とはなしにである。理智的判断によるのではなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判断が然らしめ

ると云ふでもなく、それはたゞ何とはなしにである。郷土の人心を惹きつける魅力は、實に此の何とも言ひあらはされない所から發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融かした一種不思議な音樂的な、詩的な魅力である。また私たちが郷土を慕ふ心は全く自分にもよくわからない内心自發の情緒である。此の不可思議な情緒の存在してゐる事實は、恐らく如何なる理智の人と雖も否定することは出來ないであらう。けれども、今の時代には追々此の自分の郷土と云ふものを失ひつゝ、ある人が多くなりつゝ、あることも、亦明かな事實である。私は常に、漁夫に取つて、海は單に彼等に生計の資を與へる爲のみの場所でなくして、又實に彼等に取つての貴い心の糧を與へる領土であると思つてゐる。全く漁師ほど海を愛することの

Emerson
(1803-1882)
エマーソン
アメリカの
思想家
詩人

切なる者はない。それは海は彼等に取つては離れがたい心の世界である。農夫に取つて山野田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。外に愛慕すべき郷土を失ふことは、同時に内に心靈の故郷を失ふことである。漁師に取つて海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁師は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、農夫は心靈の郷土を失ふのである。幾度も引合ひに出す言葉であるが、私にはどうもエマーソンの自然論の中の左の一節は忘れがたい。
「……樵夫の伐る一個の材木と詩人の見る樹木との間に區別を生ずる。私が今朝見た愛すべき風景は疑もなく二十三十



ほどの農圃から成立つてゐる。誰は此の畑を所有し、彼は彼の畑を所有し、また某は向ふの森林地を所有してゐる。しかし彼等の中誰一人も此の風景を所有するものはないのである。蓋し地平線の中には、あらゆる部分を全きものに統べて観ることの出来る眼をもつた者の外には、何人も所有せぬ一つの財産がある。即ちかくの如き人は詩人である。此の財産こそ此等三人の農圃に於て最も優れたものであるが、彼等の所有證明書は此の財産に對しては何等の權利を與へぬのである。」

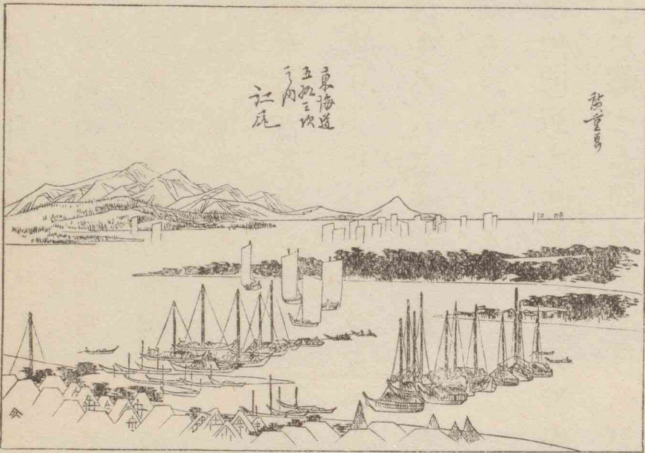
田中
十
田中
十
田中
十

此のエマーソンの所謂二つの心を合せ持った人々が最も幸福な農夫であり、樵夫であり、漁夫であると私は思ふ。樹を材木として伐る樵夫は、同時に樹木を全き一つの物として眺め得る詩人であるのに何の差支があらう。海を漁りの場所とすると同時に、其處を心の郷土として愛することの出来る漁夫が、最も幸福な漁夫であるべきである。

郷土に定住してさういふ幸福を見出し得る人は、眞に郷土を有する人だともいへる。私たちはさういふ人々の生活が最も懐かしく思はれる。

長い間アメリカへ往つてみた一人の藝術家が、久しぶりに故國の自然や人間の生活を、彼の新鮮な眼で眺め直した印象記を書いた中に、日本の農民の生活について書いた次の如き一節があ

つた。



(畫重廣) 尻江道海東

兩側の田圃は、みんなかはいらしい庭園だ。そこには此の國

「彼等はどんな仕事の中にも、きつと楽しみを見つけ出す。さうして其處へ彼等の藝術を加味する。日本の百姓がその農圃を藝術的に耕すことは本當に君の國のガーデナーがガーデンを作る程に繊細な美的注意を拂つてゐる。あのヒロシゲの繪で有名になつた東海道を汽車に乗つて旅をして見ると、

彼等
日本人

君の國
アメリカ

ガーデナー

Gardener
岡丁

ヒロシゲ

歌川廣重
江戸後期の浮世
繪師
安政五年(一五二八)
歿
年六十二

郷土

河田

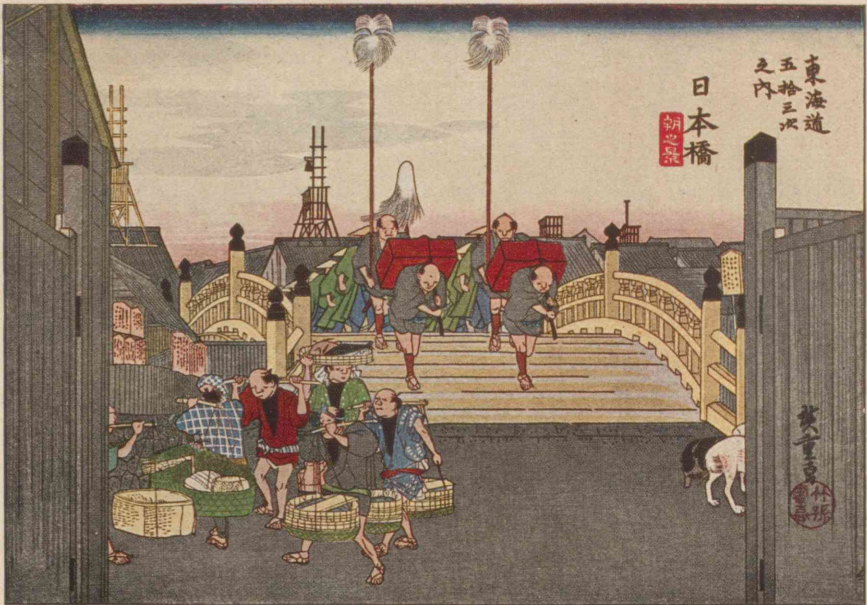
二

の百姓が、仕事を楽しんだ蹟が、鮮かに残つてゐる。君の國の
 労働者が仕事を苦みだと思つて、早く晝間の八時間が過ぎて、
 自由の夕暮の來るのを待つてゐるあの心持に比べると、日本
 人は、まことに幸福な生活をしてゐると謂はなければならな
 い。

日本の百姓だとして、皆が皆、さうだとも謂へまいけれども、併しな
 ほ多くのさうした詩人の心を持つた人々のある事は、否む事の
 出來ない事實である。私たちは此の貴い事實を祝福せずには
 居られない。
 西洋のある新しい女の哲學者の書いたものゝ中にも、こんな一
 節があつた。

「ロシアと戦争中、粗末な米の飯を有難がつてゐた日本の兵士

橋 木 日



原 田 小



(筆重廣) 内の次三十五道海東

は、何かの機会に僅かばかりの草花でも見ると、ヨーロッパの遠足家のそれにもまして一種の精神的更新を感得したといふことである。一體ヨーロッパの遠足家といふものは、無慈悲にも自然の最も美しい春の着物である草花を汚したり、さまざまの樹木や記念物を傷つけ、卓子や椅子などにまで容赦なく自分のつまらない名前などを彫りつけたりして、彼等自身を樂しませてゐる輩である。

私たちは一般のヨーロッパ人が、それほど自然を愛し得ない人たちであるかどうか、事實を知らない。しかし、私たち日本人が一般に自然を愛する切なる心を持つた民族である事實は信じて疑はない。自然は何と云つても、私たちの心の故郷である。脚氣患者が郷里に歸ることによつて何時となしに健康を恢復

することが出来るやうに、私たちの傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し、自然に懐かしむことによつて、その健康を取戻すことが出来る。

自然を魂の郷土として懐かしむことの出来る幸福を、私たちは永遠に失ひたくない。私たちは自分にも、また自分の子供たちにも、永遠に郷土の有する魅力を失はせたくはない。それは私たちの爲の搖籃であつて、また墳墓であるべきである。(對山雜記)

二 幼兒

小林 一茶

こぞの夏竹植うるころ、うき節しげきうき世に生れたる娘ものにさとかれとて名をさとよぶ。今年誕生日祝ふころほひに

良夜姨捨雨
十五夜もたゞの
山也秋の雨
おどる夜やさそ
ひ出さるゝ庵の
笠
玉になる欲はあ
る也竹の露
一茶

良夜姨捨雨
十五夜もたゞの
山也秋の雨
おどる夜やさそ
ひ出さるゝ庵の
笠
玉になる欲はあ
る也竹の露
一茶

蹟 筆 茶

なり、手うちく、あは、あた
まてんく、かぶりく、ふり
ながら、おなじき子どもの風
小車といふもの持てるを、しき
林りにほしがりてむづかれば、
一とみに取らせけるに、やがて
むしやく、しやぶつて捨て、
露程執念なく直ちに外の物
に心移りて、そこらにある茶
碗を打破りつゝ、それも直ち
に倦みて、障子の薄紙をめり
めりむしるに、よくした、よく

した。と賞むれば、まこと、思ひ、げらゝと笑ひて、ひたむしりに
むしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきらゝしく清く
見ゆれば、なかく心に心の皺を伸しぬ。

又、人の來りて「わんゝはどこに。」といへば、犬に指さし「かあゝ
は。」と問へば、鳥に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれて
あいらしく、春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺ゆ
る。

折から門に月さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲のすれば、
たゞちに物投げすてゝ、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ手眞
似して嬉しげなるを見るにつけ、いつしかかれをも振分髪のと
けになして踊らせたらんには、二十五菩薩の管絃よりもはるか
にまさりて興あるわざならんと、我が身に積る老を忘れて憂さ

二十五菩薩
観音勢至などい
ふ二十五の菩
薩、阿彌陀佛を
念ずる者の臨終
には紫の雲の上
に音楽が聞えて
二十五菩薩が來
迎するといふ

をなんはらしける。

かく日すがら牡鹿の角のつかの間も手足を動かさずといふこ
となくて遊び疲るればにや、朝は日のたくるまで眠る。そのう
ちばかり母は飯炊ぎ、そこら掃きかたづけてやがて閨に泣聲の
するを目の覺むる合圖と定め、手かしこくも抱き起して、乳房あ
てがへば、すばゝと吸ひながら胸板のあたりを打敲きて、にこ
にこ笑ひ顔をつくるに、母は長き胎内の苦みも日々の襁褓の穢
はしきも打忘れて、手の中の玉と撫でさすりて、一人喜ぶなりけ
り。

蚤のあとかぞへながらに添乳かな。(一茶全集)

夏目漱石

名は金之助
英文學者
小説家
東京生
大正五年歿
年五十

風や海に夕
日を吹き落
す
漱石

廻廊の柱の
影や海の月
漱石

春宵

夏目漱石

山里の朧月夜に乗じてそゞろありきをする。 觀海寺の石段を

風や海に夕日を吹き落す

廻廊の柱の影や海の月漱石

夏目漱石筆蹟

登りながら、仰數春星一二三。といふ句を得た。余は別に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雑話をする氣もない。偶然と宿を出て、足の向くにまかせてぶら／＼するうち、つい此の石磴の下に

出た。しばらく、不許葦酒入山門。といふ石を撫でて立つて居たが、急に嬉しくなつて登り出したのである。

石段を登るにも骨を折つては登らない。一段登つて佇むとき何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寐ぼけた空の奥から小さい星がしきりに瞬をする。句になると思つて又登る。かくして余は到頭上まで登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。むかし鎌倉へ遊びに行つて、いはゆる五山なるものをぐる／＼尋ねてまはつた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、やはりこんな風に石段をのそり／＼と登つて行くと、門内から黄色な衣を着た頭鉢の開いた坊主が出て來た。

五山
建長寺
圓覺寺
淨智寺
淨妙寺
善福寺

余は上る、坊主は下る。すれちがつたとき、坊主が鋭い聲で「何處へ御出でなさる。」と問うた。余はたゞ「境内を拜見に。」と答へて同時に足をとゞめたら、坊主はすぐに「何もありませんぞ。」と言ひ捨て、すた／＼下りて行つた。

あまり洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭をふりたてふりたて、遂に姿を杉の木の間隠した。其の間かつて一度も振返りはしない。成程禪僧は面白い。きび／＼して居るなどのつそり山門を這入つて見ると、廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるでない。余はその時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得て居たからと

いふ譯でない、禪のぜの字もいまだに知らぬ、唯あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

かうやつて美しい春の夜に何等の方針も立てずに歩いてゐるのは實際高尙だ。興來れば興來るを以て方針とする。興去れば興去るを以て方針とする。句を得れば得たところに方針が立つ。得なければ得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。

「仰數春星一二三」の句を得て石磴を登り盡した時、臙に光る春の海が帯の如くに見えた。山門に入る。絶句は纏める氣にもならなくなつた。即座にやめにする。

石を登んで庫裡に通ずる一筋道の右側は、岡躑躅の生垣で、垣の向ふは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽かに

光る。數萬の莖に數萬の月が落ちた様だと見上げる。何處やらでしきりに鳩の聲がする。棟の下にでも居るらしい。雨垂落の處に妙な影が一行に並んでゐる。木とも見えぬ草で



又平
大津繪の祖
元祿頃の畫家

又平の繪

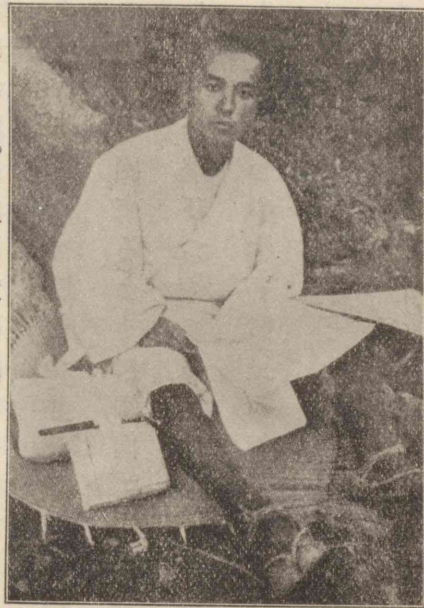
は無論ない。感じからいふと又平のかいた鬼の念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで一行に行儀よく並んで踊つてゐる。その影が又本堂の端から端まで一行に行儀よく並んで踊つてゐる。臙夜にそゝのかされて、鉦木も奉加帳も打捨て、誘ひ合せるや否や此の山寺へ踊りに來たのだらう。高さは七八尺もあらう、近寄つて見ると、大きな霸王樹である。高さは七八尺もあらう、

絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて柄の方を下に、上へくと繼ぎあはせたやうに見える。あの杓子が幾つ繋がつたらおしまひになるのか、わからない。今夜のうちにも廂をつき破つて屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來るときには、何でも不意にどこからか出て來て、びしやりと飛びつくにちがひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちに段々大きくなるやうに思はれない。杓子と杓子の連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹は世の中にたとあるまい。しかも澄ましたものだ。(漱石全集)

長塚 節
歌人
小説家
茨城縣結城郡
の人
大正四年
歿
年三十七

四 田園の春

長塚 節



長塚 節

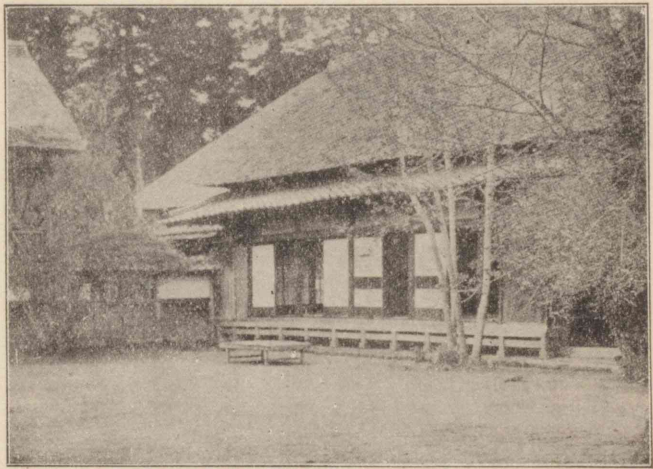
春は空から、さうして土から微かに動く。毎日のやうに西から埃を捲いて来る疾風がどうかするとはたと止つて、空際にはふわふわとした綿のやうな白い雲がほつかりと暖い日光を浴びようと、して僅かに立騰つたといふやうに、動きもしないでじつとして居ることがある。水に近い濕つた土が暖かい日光を思ふ存分に吸うて其の勢ひづいた土のかすかな刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木の地味な蕾は目に立たぬ間に少しづつ、延びてひら

ひらと動き易くなる。其の刺戟から蛙はまだ蟄居の情態に在りながら、稀にはそつちでもこつちでもくゝと鳴き出すことがある。空から射す日の光はそろゝと熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うて止まぬ。土は凡てを段々と刺戟して堀の邊には蘆やとだしばや其の他の草が空と相映じてすつきりと其の首を擡げる。軟かさに満たされた空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひらゝと止まず動きながら煤のやうな花粉を撒き散らして居る。蛙は假死の情態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時には彼等の騒がしい聲は只空にのみ響いて快げである。

彼等は更に春の到つたことを一切の生物に向つて告げる。草や木が心づいて其の活力を存分に發揮するのを見ないうちは鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木は疾うに花を捨て、嫩葉の姿になつて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が爽かたかつ朗かな朝日を浴びて快光を保ちながら、蒼い空の下に、まだためらうて居る。岬のやうな形に偃うて居る水田を抱へて、周圍の林は漸く其の本性のまにまに、勝手に白つぼいのや赤つぼいのや、黄色つぼいのや色々茂つて、それが氣が付いた時に急いで一つの深い緑になるのである。雑木林の其處ら此處らに散在して居る開墾地の麥もすつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて羞かしさうに葉の間からこつそりと四方を覗く。雑木林の間には又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立

つ。其の麥や芒の下に居を求めぬ雲雀が時々空を占めて春が深けたと喚びかける。さうすると其の同族の聲のみが空間を支配して居可き筈だと思つて居る蛙は、其の轉る聲を壓し去らうとして互の身體を飛び越え、鳴き立てるので、小勢な雲雀はすつとおりに麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中のみ、之を仰げば眩ゆさに堪へぬやうに其の身を遙かに煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉の拗切れるまでは烈しく鳴らさうとするのである。蛙は愈益、益々、鳴き誇つて、櫛の木のやうな大きな常緑木の古葉をも一時にかりと落させねば止むまいとする。此の時凡ての樹木やそれから冬季の間にはぐつたりと地に附いて居た凡ての雑草が爪立して只空へくと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引きとめ

て放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つて居る。



家の節塚

冬季の間は土と平行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して各自に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋を膨脹させて身を撼がしながら殊更に鳴き立てる。白い練絲のやうな雨は水が田に満つるまでは灑いで又灑ぐ。鳴くべき時は鳴く爲にのみ生れて來た蛙は刈

株を引つ返し、働いて居る人々の周圍から足下から逼つて敏捷に其の手を動かさせ動かせと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑む時には日中の暖かさに人もぐつたりとなつて田圃の短い草にごろりと横になる。更に蛙はひつそりと靜かな夜になると、如何に自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇るものゝ如く力を極めて鳴く。雨戸を閉づる時蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を擦つて百姓の凡てを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて百姓は皆短い時間に肉體の消耗を回復する。彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を喚び返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴く

其の聲に搖られつゝ夜の間に生長する。櫟や檜や其の他の雑木は蛙が鳴けば鳴く程さうしてそれが鳴き止む季節までは幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しと／＼と屢梢を打つ雨が空の蒼さを移したかと思ふやうに力強い深い緑が地上を掩うて爽かな涼しい蔭を作るのである。鬼怒川の西岸一部の地にもかうして春は來り且推移した。憂あるものも無いものもひとしく耒耜を執つて各其の處に就いた。(土)

五 蛙

泉 鏡 花

泉鏡花
名は鏡太郎
小説家
明治六年加賀金澤生

鳴かぬ蛙
東京小石川區傳通院にも其の傳説がある

番町
東京麴町區の一地域

矢來
牛込區矢來町もと小濱藩主酒井侯の下屋敷

鳴かぬ蛙の傳説は諸國に言傳へられてゐる。大抵是には昔の名僧の話が伴なつて居て、何れも讀經の折、誦念の砌に其の喧噪しさを悪んで聲を封じたと言ふのである。坊さんは偉い。蛙が居ても騒がしいぞと申されて鳴かせなかつたのである。番町の私の居るあたりでは犬は吠えても蛙は鳴かない。一度だつて贅澤な叱言などは言はないばかりか、實は聞きたいのである。勿論叱言を言つたつて蛙の方ではお約束の「面へ水」だらうけれど、仕事をして居る時の一寸合方にあつても悪くないのだし、一體大好きなのだ、ちつとも鳴かない、殆ど一聲も聞えないのである。高臺だから此の邊には居ないのらしい。以前牛込の矢來の奥に居たころは、あそこも高臺で、蛙が鳴いても、たまに一つ二つに過ぎないのが物足りなくて、御苦勞千萬にも、向島の

向島の三圍
隅田川の左岸
吾妻橋の上手

下六
麴町區下六番町
作者の居住地

清水谷
麴町區の端にあ
る地

三圍あたり、瘦腕を組みながら、それでもものんきに歩いた事もあつた。もうかう世の中がせつこましく、物價が騰貴したのでは、そんな馬鹿な眞似はして居られない。併し此の時節あの聲は私は思ひ切れず好きである。處で番町も下六の此の邊だからと云つて一町許麴町の電車通りの方へ寄つた立派な角邸を横町へ曲ると、其處の大溝ではくわつ、くわつ、ころころと唄つて居る。併し、月夜にしる、暗夜にしる、唯立つて聴くとなると、三圍田圃をうろついて、狐に魅まれたと思はれる様な、時代な事では濟まぬ。誰に何と怪しまれようも知れないのである。さらばと言つて、「一寸蛙を承りまする儀で。」と一々町内の差配へ断るのでは、木戸錢を拂つて時鳥を見るやうな殺風景になる。と言ふ隙に、何の清水谷まで行けばだけれど、要するに無精な

里見葎
有島生馬の弟
本名山内英夫
小説家
明治二十一年横濱生

白樺
武者小路實篤志
賀直哉里見葎諸
氏の出した文藝
雜誌

ので家に居ながら聞きたいのが懸値のない所である。里見葎さんが、まだ本家有島さんに居られたお近づきの初めの頃であつた。何かの序に此の話をすると、庭の池には、幾らでも鳴いて居る。…そんなに好きならふんづかまへて上げませう。背戸に飼つて御覽なさい。」と腕白らしい事を言つて歸られた。翌日だつたか御免下さいと耄けた聲をして訪れた人がある。「山内から出ましたが。」と言ふのを、私が自分で取次いで、は、あれだな、白樺を支那靴と間違へたと言ふ名物の爺さんは。」と顔かれたのが、コップに油紙の蓋をしたのに、吃驚したのやら、呆れたのやら、ぎよつとしたのやら、途方もないと言つた面をしたのやら、手を突張つて慌てたのやら、目ばかりばちくしてすくんだのやら、五六匹這入つたのを届けられた。一筆添へてある。――

「お約束の、この連中の、早い處を引捉へてお目に掛けます。併し、どれも面つきが前座らしい、眞打は追つて後より。」私はうまいなと手を拍つた。いや、まだコップを片手にして居る。「うまい。」と膝を叩いた。いや、まだ立つたまゝで居る。いや、何しろ感心した。

臺所から出て来て仰山に覗き込む細君を、これ平民の子はそれだから困る。……食べものではないよ。とたしなめて、どうだい。」と水盤：……も些と大仰だけれど、まさか缺摺鉢ではない、杜若を一年植ゑた泥のまゝの土鉢：……それへ移して、簀の子で蓋をした。」
 葎さんの好意だし、聲を聞いたら聞分けて、一匹づつ名でもつけようと思ふと、日が暮れてくゝとも鳴かない、ばちやりと水の音もさせなければ、其の晩はまたしんとして風さへ吹かない。……

馴染なる雀ばかりで夜が明けた。金魚を買つた子供のやうに、のしかゝつて踞んで見ると、逃げたぞ、畜生、唯の一匹も影も形もなかつた。

俗に蟄は魔ものだと言ふ。嘗て十何匹行水盥に伏せたのが一夜の中に形を消したことは現に覺えて居る。雨蛙や青蛙がそんな離れ業はしなからうと思つたが――勿論、それだけに蓋も嚴重でなしに、隙があればあつたのであらう。

二三日経つて、葎さんに此の話をした。丁度其の日同じ白樺の社中で御存じの木下利玄さんが連立つて見えて居た。――木下さんの方は、葎さんより三四年以前からよく知つて居たが――當日連立つて見えた。早速小音曲師逃亡の話をする、木下さんの言はるゝには、大方それは有島さんの池へ歸つたのでせう。蛙

木下利玄
 子爵
 歌人
 大正十二年卒
 年三十九

柏木

東京の西郊

淀橋町の字

木下子の家はそ

の四百〇四番地

淀橋

柏木の西で神田

上水にかけた橋

の名

今はそれを町の

名に用ひてゐる

は随分遠くからも舊の處へ歸つて來ます。」と言つて話された。嘗て、木下さんの柏木の邸の、やはり庭の池の蛙を捉へて、目印に水掻の附けねを紅い絹絲でゆはへた幾匹かを遠く淀橋の方の田の水へ放したが、三日め四日め頃から氣をつけてもとの池の面を窺ふと、脚に絲を結んだのがちら／＼居る。半月ほどの間には殆ど放した數だけが戻つて居たとの事であつた。―あとで、何かの書物で見たのであるが、蛙の名は「歸る」といふ意から出たのださうである。此は考證じみて來た。就いて思ふのに、本當は、どうか知らないが、蛙の聲は随分大きい、高いやうだけれども、餘り遠くでは響かぬらしい。有島さんの池は、さしわたし五十間までは離れては居まい。それなのに、私の家までは聞えない。

大塚の火薬庫
小石川區大塚町
に在る陸軍火薬
庫
東京高等師範學
校の前
隣に東京市電氣
局大塚線電車車
庫があつた

傳通院
小石川區にある
寺の名
徳川家康の生母
の墓所

久しい以前だけれど、大塚の火薬庫わき、いまの電車の車庫のあたりに住んで居た時、恰も春の末の頃、少々待ち人があつて、其の遠くから來る傳の音を、廣い植木屋の庭に面した、汚い四壘半の肱掛窓に、肱どころか、腰を掛けて、申し上るやうにして待ちながら、耳をすまして聽いた事がある。

昨夜も今夜も夜が更けると、こうと響く聲が遙かに聞える、それが傳の音らしい。最も護謨輪などと言ふ贅澤な時代ではない、近づけばから／＼と輪が鳴るのだつたが、いつまでも唯こうと鳴く。それが離れも離れた、まつすぐに十四五町遠い、丁度傳通院前あたりと思ふ處に聞えては、波の寄るやうに響いて、颯と又汐のひくやうに消えると、空頼みの胸の汐も寂しく泡に消える時、それを、すだき鳴く蛙の聲と知つて果敢ない中にも懐かしさ

に、不埒な凡夫は、名僧の功力を忘れて、所謂「鳴かぬ蛙」の傳説を思ひうかべもしなかつた：その記憶がある。それさへ、いま思へば空吹く風であつたらしい。(愛府)

高村光太郎

彫刻家

洋畫家

詩人

明治十六年東京

生

六 五月の土壤

高村光太郎

五月の日輪はゆたかに輝き
五月の雨は緑に降りそゝいで
野に
まん／＼たる氣魄はこもる。
肉體のやうな土壤は

あたゝかに、ふくよかに、
まるく、うづたかく、ひろ／＼と、
無限の重量を泡だたせて
盛り上り、盛り上り、
遠く地平に波をうねらす。

あらゆる種子をつゝみ、はぐくみ、
蟲けらを呼びさまし、
悪しきもの善きものゝ差別を絶ち、
天然の律に従つて地中の本能にいきづき、
生くるものゝの爲には滋味と疇とを與へ、
朽ち去るものゝ爲には再生の隱忍を教へ、

永劫に

無窮の沈黙を守つて

がつしりと横たはり、

且堅實の微笑を見する土壤よ、

あゝ五月の土壤よ。

土壤は汚れたるものを恐れず、

土壤はあらゆるものを淨め、

土壤は刹那の力を盡して進展する。

見よ、

八段の麥は白緑にそよぎ、

三段の大根は既に分列式の儀容をなし、

其處此處に萌え出づる無数の微物は

蒼空を見はる嬰兒の眼をしてゐる。

あゝ、そして

一面に沸きたつ生物の匂よ、

入り亂れて響く呼吸の音よ、

無邪氣な生育の争闘よ。

わが足に通つて來る土壤の熱に

我は烈しく人間の力を思ふ。(明治大正詩選)

星野恆
漢學者
歴史家
文學博士
東京帝國大學文
科大學教授
大正七年薨
年七十八

七 皇太后宮を悼み奉る 星野 恆

野分の風

國の爲科戸の風も心して稻葉の上はよきて吹かなん

霜ふむ軍人

大宮の火桶のともも寒き夜にみいくさ人は霜やふむらん

荒海の上

明治二十四年
明治天皇與佐世保の兩鎮守府へ
行幸ありけるを

日よりまつ御船の中やいかならん霧たちわたる荒海の上に

功臣の跡

明治三十七年二月六日夜坂本龍馬が戰勝疑なき由言上する夢を御覽になつた

あはれ明治天皇の御事まし〜て追慕の涙未だ乾かざるに、今又皇太后宮の登遐を承りて惶愕の心擣くが如し。臣民忽ち依恃を失ひ、天地重ねて諒闇に入る。嗚呼、哀しい哉。恭しく惟るに皇太后宮徳を桃花殿に毓ひて位を長秋宮に正し給ひ、明治天皇登極の初、日本帝國維新の際、聖業を九重の深きに翊けて仁風を四海の廣きに敷き給ひ、六千餘萬の衆庶、皆日月の光を齊へたるを仰ぎ、四十五年の歲月、長く雨露の恵に浴するを喜べり。あはれ、皇太后宮深仁叡徳、田野の農民を憫ませ給ひては野分の風に稻葉の亂れを歎かせ給ひ、出征の將士を思ひやらせ給ひては大宮の中にも霜ふむ軍人の勞苦を體せさせ給へり。或はかしこき御巡幸の後を守らせ給ひて、霧立ち渡る荒海の上に御心を摧き、亡き功臣の跡を偲ばせ給ひて、烏羽玉の夜の御夢にさへ見

檀林皇后

嵯峨帝の後
橋嘉智子
學館院を立てられた
嘉祥三年(一二三〇)崩

仁正皇太后

聖武天皇の皇后
光明子の尊號
嘗て悲田院施藥院を置いて飢者病者を療養させられた天平寶字四年(一二三〇)崩
御年六十

御筆蹟

花みつゝさし後れたるまどのとにほふも嬉しおぼる夜の月

窓前春月

花

さし

おぼる夜の月

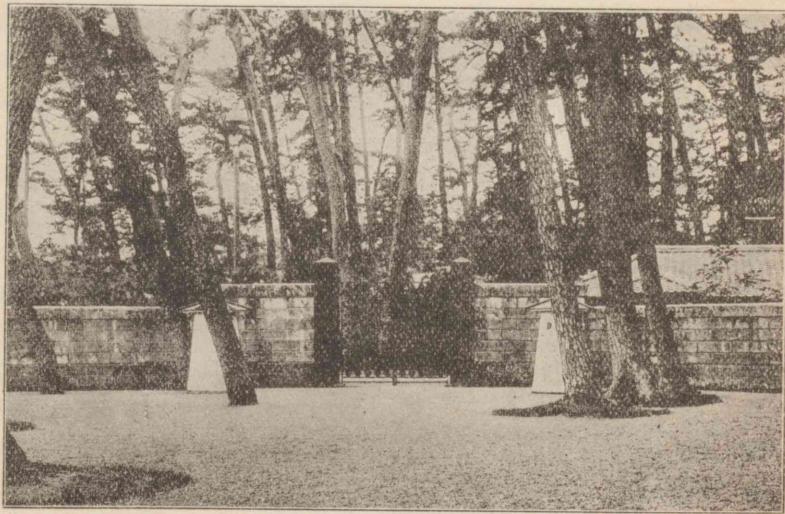
御筆蹟

そなはし給へり。女學校を興し教育を奨めて、屢其の庭に臨ませ給へるは、檀林皇后の懿績にも超え、病者を勞り貧民を恵み、災厄に罹れる者を卹み給へるは、仁正皇太后の慈範にも勝り給ふ。後への政の御暇には、敷島の

昭憲皇太后御筆蹟
道を楽しみ、千鳥の跡をも尋ねさせ給ひて、德音萬首の上に出で彝訓百世の後に垂る。眞に是、婦道の儀刑にして内教の精粹なり。いづれの國の坤宮にか又かゝる辱き大

御心はおはしますべき。あはれ明治天皇崩御の後、御哀傷は極りなかるべけれども、今上天皇踐祚まし〜て御孝養至らぬく

靜浦
駿河國沼津市の
東部御用邸のあ
る處



沼津御用邸

まなければ、上下皆寶算の窮
なからんことを祈り、内外齊
しく慈光の愈、遠からんこと
を冀ひ奉りしに、富士山の煙
久しく絶えて靈藥復得べか
らず、靜浦の波二たび返らず
して仙駕遂に停むるに由な
し。臣等世々の史籍を繕き、
古を稽へ今を察するにも、坤
徳の雙びなくましますを慕
ひまつれり。いかでか天を
仰ぎ地に伏して、聖壽の延べ

難きを悲しまざらん。乃ち恭しく丹誠を布きて慟地の深哀を
擧げ、蕪辭を捧げて以て在天の慈鑒を仰ぎ奉る。

史學會評議員長文學博士 星野 恆

ハ 奈良の舊都

藤岡作太郎

咲く花のほふが如く盛なりし奈良の舊都を弔へば、風蝕雨打
こゝに千又二百年を過ぎたれども、七堂伽藍の偉觀今に昔の面
影を残して、そゞろにありし世を偲ばしむ。春の日うらくと
して、志貴葛城の峯々に霞たなびける時、まづ法隆寺を訪へ。日
東帝國第一の古名刹は、寂々として菜畝麥隴の間に眠るが如し。
五層の高塔は相輪高く張りて、七寶瑠璃の莊嚴を現じ、金堂中門

藤岡作太郎
國文學者
文學博士
東京帝國大學文
科大學助教授
加賀金澤生
明治四十三年卒
年四十一
咲く花の
青丹よし奈良の
都は咲く花のほ
ふが如くいま
盛りなり
(萬葉集)



釋迦法隆寺金堂の三尊

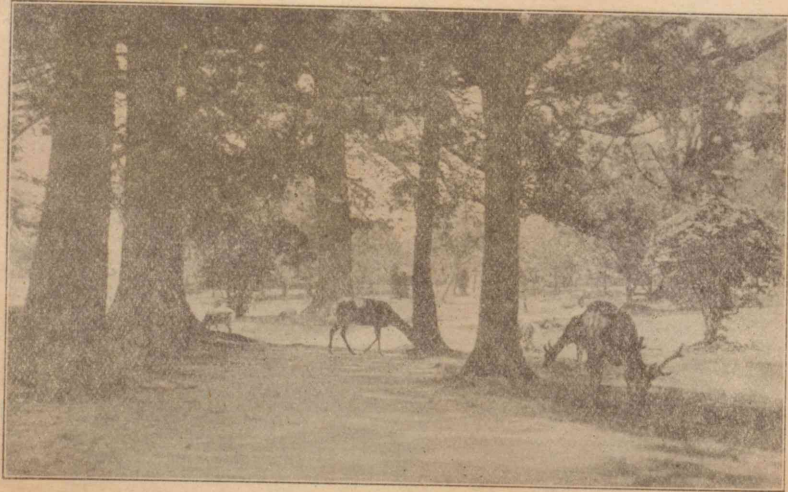
の蔓高くその間に聳えて、一抹の霞薬師寺の古塔を罩めたり。



法隆寺金堂壁畫

の殿閣は畫棟雲を飛ばして推古式の遺韻を傳ふ。燭を秉つて壁畫に對すれば、諸佛踞々として動かんとし、髣髴として名匠の神に接する思あり。薬師三尊、止利佛師の釋迦三尊、夢殿の觀世音、四天王の像、玉蟲厨子、橘夫人念持佛厨子、何れか稀世の珍品にあらざる。去りて舊都に向へば、春日の森は緑滴らんとし、若草山には春色満てり。大佛殿

翠柳依々たる猿澤池のほとりに
さまよひて藤家の氏寺たりし興
福寺の衰残を憐み、麋鹿濯々たる
神苑をたどりて、三月堂に不空羅
索・觀音・梵天・帝釋・執金剛神等の名
作を觀、更に東大寺に五丈三尺の
大佛を仰ぎ見れば、聖武天皇の豪
華の程も懷はるゝなり。天平勝
寶元年のその昔、帝^{みかど}皇后皇太子・文
武百官を率ゐて大佛を拜し、陸奥
に黄金の産出せるを祝して自ら
三寶の奴と稱し給ひし盛儀いか



春 日 神 社 神 苑



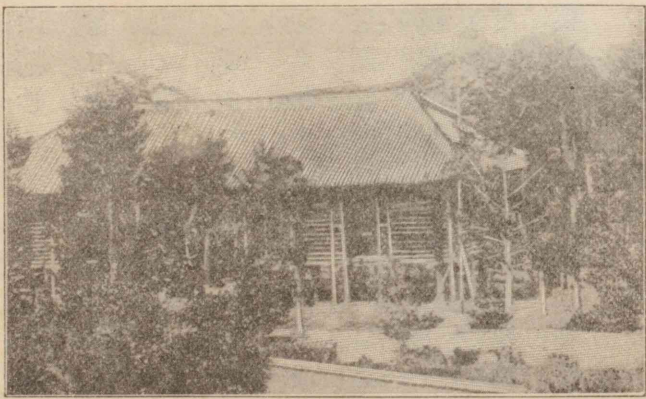
寺 福 興 と 池 深 猿

ばかりなりけん。慈雲西極に
 靡き法雨東陲に注ぐ。盧舍那
 佛の尊像を繞りて花降り、音樂
 聞え、讀誦梵唄の聲はた雲外に
 搖曳したりし有様は實にや極
 樂淨土も斯くやありけん。正
 倉院の勅封倉は今に奈良文化
 の粹を鍾め、戒壇院の四天王は
 天平時代の藝術の精を凝らせ
 り。按ずるに、推古天皇の朝、支
 那との交通公に開けてより、彼
 の邦の文化は一瀉千里、潮の如

く、奔注し來りて、我が邦の文化はこゝに一大變に際會せり。

當時、國運漸く隆昌に赴き皇威も遠
 くに及び、國庫も富裕を致しければ、
 奈良の帝都の經營となり、七世七十
 餘年こゝに都して、前代に睹るべか
 らざる燦然たる文化を現出せり。

又古事記、書紀の編纂もあり、風土記
 の撰進もあり、懷風藻と云へる詩集
 も成り、碩儒吉備眞備、安倍仲麿も出
 て、萬葉集と云へる歌集も撰せられ、
 歌人柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大
 伴旅人、同家持等輩出せり。帝室の歸依と人民の信仰とに依り



院 倉 正

健陀羅

印度の西北ベシヤワル地方の稱より三世紀西曆一世紀の間に羅馬の加味形式を彫刻した彫像の藝術をいふ

Gandhâra

唐招提寺

奈良市の西一里都跡村大字五條にある

律宗の本山

秋篠寺

奈良市の西北一里餘平城村大字秋篠にある今は淨土宗

て、佛教は俄かに興隆し、従ひて美術は斐然として章をなしぬ。大伽藍・大寺院の建築相次ぎ、彫塑繪畫は精妙の域に到り、之に伴うて工藝も皆進歩發展せり。されば曾て健陀羅に於て東西特長の融和したりし、もしくは、亞細亞各地に發生したりし美術の精華は、相率ゐて我が邦に奔注し、こゝに凝つて奈良朝の美術を作り、わが文化史、わが藝術史に於ける最も誇るべき時代となりにき。而して豪華を好み、政教一途の皇謨を實行し給ひし聖武天皇の御宇なる天平時代は、實にその高潮期なりけり。嗚呼、一木一草皆これ舊都の遺物ならざるはなし。流鶯飛燕豈敢へて九重の春色を飾りたるものと類を異にせんや。落日の光は唐招提寺の鴉尾に映じて、秋篠寺の晚鐘は春の入相を告ぐ。物靜かなる奈良の舊都は、今や暮靄の裡に沈まんとするなり。

(新體國語教本)

厨川白村

名は辰夫

文學者

京都帝國大學教授

文學博士

大正十二年歿

年四十五

出雲神話

素戔鳴命の大蛇退治、大國主命の國土平定など

穴道湖

松江市の西にある淡水湖

嫁が島

穴道湖中の小島

松江名所は

松江名所は數々あれど、千鳥御城に嫁が島

千鳥お城

松江城

九 小泉八雲の舊栖

厨川白村

山陰の古都松江は今もなほ出雲神話を想はせる夢の都である。さうだ、眠るが如き夢の都である。穴道湖畔の水郷に、土地の人はうつら／＼と夢の國をたどつてゐる。臨水亭といふ旅館の欄に倚つて松江大橋、嫁が島、どこを眺めて見ても、思ひ切つて暢氣なものである。すべてがどんよりして沈靜な薄暮の氣に包まれて、今光明の國から去らうとする影を見るやうだ。此の夢の都たる出雲の國の郷土から生れた民衆藝術である安來節に、松江名所はかず／＼あれど、と數へた千鳥お城よりも、嫁が島よりも、更に遙かに意義の深い名所がほかに、一つある。

ラフカディオ・ハーン

Lafcadio Hearn
(1850-1894)

も人とて雲詩松校等京學
と小泉化英い泉化英い泉化英
八ふ八ふ八ふ八ふ八ふ八ふ
しししししししししししし
のののののののののののの
大東高學しの大東高學しの大東高學

山陰線
京都豊岡鳥取松
江山口小郡を通
ずる鐵道線

それは殆ど世界的に有名な名所であつて、しかも日本人が殆ど顧みない名所だ。否、松江の人すら多くは知らない名所だ。いふまでもなく、それは小泉八雲先生——ラフカディオ・ハーン氏の



小泉八雲の像

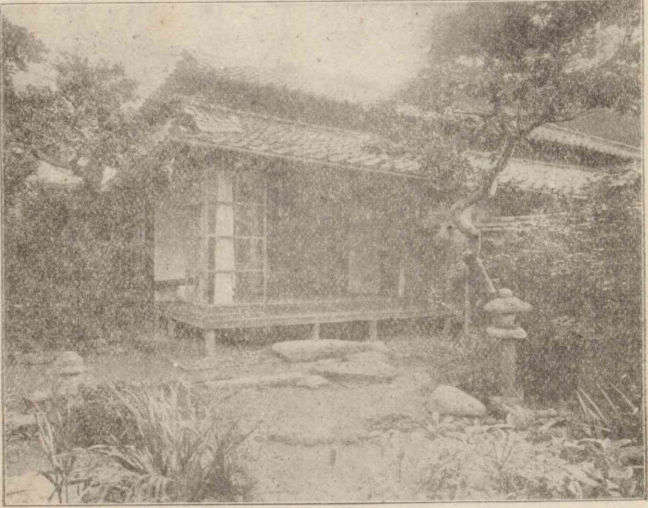
舊居である。

日本を見物に来る西洋人の中には、日本人の全く知らない所をやつとの事で尋ね當て、あの不便な山陰線の汽車に乗つて見に行く人が近頃は殊に多い。それどころか、はるく、太平洋の彼方から先生の遺跡を訪はんがためにのみ日本に來遊する外人もあるのだ。現にこのたび米國で先生の全集刊行の

舉あるに際して、松江時代の舊居の寫眞をとるために、かの國からわざ／＼出かけて來た人さへあるではないか。あの稀世の名文を以て日本を世界に紹介された先生の遺跡を保護しようともせず、先生の功に報いるに殆ど何事をも盡してゐない日本人の無知と忘恩とを見て、快からず思つてゐる西洋人の多いのはまことに無理のない事だと思ふ。先生にはあの十數卷の名著がある。英語の滅びないかぎり、ラフカディオ・ハーンの名は世界に不朽なのだから、その遺跡などを保護しようがしまいが、今は世にない先生のために寸毫の損益するところはあるまい。たゞ日本人として果してそれで濟むものだらうか。文藝の尊嚴を解しないその無知と忘恩とを世界に廣告して、恥だとも思はないのだらうか。

Hamdryat
樹の精
森の女神
ハムドライアッド

城跡の美しい青葉を照らす午後の日ざしが傾くころ、静かな濠
ばたの或家の門に私の車は停つた。それはいかにもさむらひ
の敗残凋落のあとを想はせるやうな家中屋敷の一つであつた。
古びた門構といひ、正面の玄關といひ、見るからに封建時代その
まゝのものであつた。正面の玄關の左手に四疊があつて、それ
は南の方の小さい庭に面してゐる。苔むした石燈籠や庭石も
かつては先生が飽かず眺められたものであつた。殊に縁側に
近い處にある百日紅だの、珍しい老木の大本蓮だのは、先生のこ
との外なる愛樹であつたと聞くさへ懐かしい。樹木の精ハム
ドライアッドの神話を語つた古代のギリシヤ人のやうに、先生
も亦草木に宿る生命に強い愛惜の念を持たれた。後年東京に
移られてからも、或寺院の老木を黄金に代へて惜しげもなく伐



小 泉 八 雲 舊 栖

りたふさうとした俗僧を見て、ひどく怒られたといふ話がある。
先生はその深い愛の生活、強
大な感情生活の裡に自然と
人生と超自然のすべてを抱
擁してゐられた人であつた。
その次の間の十疊は、先生が
楽しく起居された茶の間で
あつた。洋風の椅子などを
用ひないで座蒲團に坐り、日
本の煙管で日本の刻煙草を
吸ひながら、奥さんや來客と
打解けて語られたのはこの室であつた。

根岸さん
根岸馨井
松江の銀行家

大久保の邸
東京の西郊
大久保町大久保

この家の持主であり現在の主人である根岸さんは私をこの部屋に通して、色々な話をされた。

日本に於ける先生の舊居の地としては、この松江の外に熊本時代のものあれば、また現在未亡人の住まつてをられる東京の大久保の宅もある。しかしこの出雲の地は、日本に歸化された先生に取つては特殊な意味がある。天外萬里、漂浪の孤客として、その頃はまだよく内情を世界に知られなかつた遠い日本、しかもまた山陰の片ほとり、夢の都、神の都に來て、そこで舊藩士の女小泉氏を娶られた。そして、英米の社會からは全く韜晦し去つて、突如としてこの地からあの最大の名著「日本瞥見録」二卷を公にされたのだ。「作者は果して何處にある。」如何なる人ぞ。」と、かなたの文壇の驚異となり、はてはラフカディオ・ハーンその

日本瞥見録
“Glimps of
Unknown
Japan”

ロバート、ルイス、
ステイヴンソン

Robert Louis
Stevenson
(1850-1894)

サモア
Samoa
南太平洋中
にある大島
十個の小

人の實在をすらも疑はれた時があつた。先生と同じく近世散文の巨匠であるロバート・ルイス・ステイヴンソンも、故國スコットランドを出てからは、足跡天下に遍く、米國のサンフランシスコで結婚して後太平洋をさまよひ、はてはサモアの島に世を終へるまで、後の研究者はその足跡をたどるのに没頭してゐる。

私は松江に於ける先生のこの舊居の地が、南洋のサモアに於けるステイヴンソン終焉の地の如くに、今後は益々多くの文學順禮者の驚歎と好奇の念とを惹くことであらうと思ふ。先生自らに於ても、その楽しいゆかしい思出と愛惜とが特に松江のこの家から離れなかつたものと見えて、後年熊本から東京帝國大學に轉任される途中、まだ全く山陰地方に汽車の便のない頃、わざわざ廻路をしてこの第二の故郷を訪はれ、わが家に歸つた。

といつて喜ばれたさうである。この茶の間に接した北向の六疊の一室が、先生の書齋であつたといふ。すべてが閑寂な古びた、いかにも士族屋敷らしい空氣に満ちた部屋である。

障子を開けて縁側に出ると、その庭には小さな池があつて、真中に一本の松を植ゑた小島がある。裏手の方は以前しばらく模様がへしてあつたのを、近頃根岸さんがまた先生在住の頃の舊態に復せられたのださうだ。庭の左の方にある土藏を指さしながら、根岸さんは色々話をして私に聞かされた。

「この池の中には随分澤山蛙がゐたさうですが、それを捕らうとして、藏の後の方から蛇だの鼯だのが出て來たもんださうです。時に蛙が捕られると、あはれな悲鳴を揚げるので、その時は先生の一家が皆飛出して來て大騒をしたと、奥さんが話

されました。それで先生は時々食残りの肉を皿に入れて藏の石段に置き、蛇や鼯に與へられました。『私が御馳走してやるから、蛙を捕る事だけはよしてくれよ。』と先生はいつもいはれたさうです。」

さういふ事も根岸さんは話された。裏の籬を越えて右手に見えるのが赤山の杜で、それから聞える鳩ぼつぼや杜鵑の聲に耳を澄ましたながら、先生はこの書齋に引籠つて、冥想もし、讀書もし、創作もされたのであつた。また正面遙か向ふの方に樹間を洩れて見える山が、山中鹿之助の城址ださうである。

ゆつくり話を聽いてゐる間に、日は暮れさうになつた。再び部屋に歸つて座に就くと、もう人の顔がぼんやりするほどにほの暗かつた。私はこの夢の都に來て夢の家をたづね得た事を喜

山中鹿之助
名は幸盛
尼子氏の臣
智勇の聞えが高
かつた
天正六年(三三〇)
歿
年三十六

たなばた物語

“The Romance of milky Way”

びながら、暫くして辭し去つた。門前の濠の水は深く濁つて、青葉のゆふべの影を宿してゐた。翌日私は京に歸る前、記念のために松江の本屋でドイツのタウヒニツクの廉價版の「たなばた物語」一部を求めた。これは先生が雑誌などに載せられたゞけて、遂に未定稿のまゝで一冊の本には纏めないうて世を去られた數篇を先生の、歿後に出版したものである。松江名物の大きなあはび貝を五つと、先生のこの遺書とを家苞にして、私は夢の都たる松江を去つた。(厨川白村集)

10 松江の曉

小泉 八雲

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな

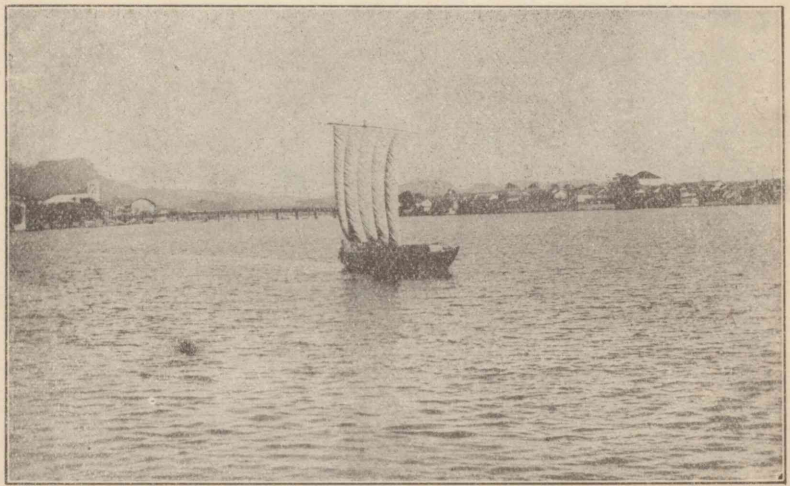
大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴ふあらゆる音響の中で最も哀れに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏である。

それから禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を揺がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から太鼓の淋しげな音が晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、大根やい。「蕪菁や蕪菁」「薪や薪」

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の底から伸びた春の若葉の軟かな緑の雲越しに朝景色を眺めやつた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わななくやうに萬象を映寫して微かに光つてゐる。此の川は宍道湖

洞光寺
松江市雜賀町に
ある曹洞宗の寺

大橋川
中海と宍道湖と
の間を通ずる川



松 江 大 橋

に向つて口を開け、湖は右手へ
 擴がつて、杳かなる連丘に包ま
 れてゐる。對岸の日本の家屋
 は戸が皆閉つてゐるので、恰も
 箱を閉ぢたやうである。夜は
 明けたが、日はまだ出ない。遙
 かに見渡すと、薄色の霞が湖水
 の盡端はつちに長くたなびいてゐる。
 その星雲状をした長い帯は、日
 本の昔の繪で見る通りである
 が、實際の現象を眺めたことの
 ない者には、畫工が奇を衒つた

としか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、
 峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横に延びて居る。だ
 から湖水は實際より遙かに大きく、味爽の空の色と入交つた、美
 しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢の
 様な一帯の丘陵は果てしのない土手道かと怪しまれる。もし
 て霧が立つに連れて、その趣はおもむろに變つて行く。朝日の
 黄色の縁が見えてくると、今までよりは更に弱い、細かな光線—
 分光鏡の紫と青目色—が水面を射る。梢の上は弱い光を受け
 る。水のかなたにある高い建物の木地の色が美しい靄の爲に
 蒸氣の立つ黄金色へとかはる。
 朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一
 艘の船が今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな奇妙な恰好

の、美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である。霞にほやけた船の精霊である。しかし此の精霊は雲と同様、光線を受けて、薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭先の川端から手を拍つ音が起つて来る。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿が見える。めい／＼帯に小さい青手拭を挿んでゐて、顔と手とを洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、軽い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜

杵築の大社
出雲大社
祭神は大國主命
官幣大社

一畑山の葉崎
出雲國簸川郡東
村にある古寺
本尊は藥師如來

んでゐるのである。最早拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。「いしくも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて世界を麗はしくなし給ふことを謝し奉る。」言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人の衷心である。朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大社に向つてもさうするのである。顔を東西南北に向けて群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の高峰を眺めて、盲の眼を開き給ふといふ葉崎如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に従ひ、掌を合せて軽く擦るものもある。しかし日本で最古の此の國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も／＼古風な神道の祈の文句を唱へる。「祓

ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゑみため。」
 手を拍つ音が歇んで、一日の仕事がはじまり、橋の上にはからこ
 ろといふ下駄の音がだん／＼高く響いてくる。大橋の上で鳴
 る下駄の音は忘れられない音である。―速くて、陽氣で、音樂的で、
 盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが
 爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ人
 の足がちら／＼するのは驚くべき光景である。この足は皆細
 くて、適當に均齊を得てゐて、古甕の古甕に描いた人物の足のや
 うに輕やかである。
 やがて學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の駆ける時に、綺麗
 な飛白の着物の濶い袖が波動するのは、ちやうど大きい蝶が羽
 搏きするやうである。親船は白色や黄色の大きい翼を擴げる

し、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は煙突から煙を吐き始
 める。
 (まだ知らぬ日本の瞥見の譯文)

二 ウェストミンスターとパンテオン

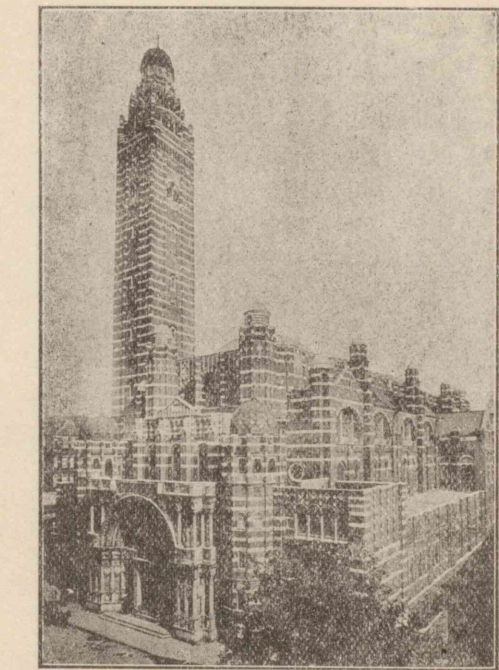
河上 肇

倫敦のウェストミンスター寺院は、偉人國葬院とも謂ふべき處
 である。巴里のパンテオンも、略之に似たもの。

倫敦に最初往つた時は僅か一週間滞在したゞけであるが、其の
 一週間の中に三度も往つた程。ウェストミンスター寺院は私の
 氣に入つた。始めてウェストミンスターに行つた時、人々何れ
 も帽を手にせるを見て、西洋の儀禮をば少しも心得ぬ私であり
 ながら、直に、寺院では帽を脱ぐものだと氣附いた。それほど

ウエストミンス
 ター寺院
 倫敦の古い
 寺
 英國の偉人
 の墓が多い
 Westminster Abbey
 パンテオン
 巴里の寺
 佛國の偉人
 の墓が多い
 Pantheon
 河上肇
 經濟學者
 法學博士
 京都帝國大學教
 授

全體の空氣が落ちついて居て、如何にも人の心を靜める感じがした。さうして隅から隅まで案内者なしに、自分一人て思ふが



院寺ータスンミトスエウ

まゝに、逍遙することの出來たのは、如何にも悦ばしかつた。無料に入れぬ處でも、一定の金さへ拂へば、何時でも何時までも思ふがまゝに逍遙することが出來た。經濟學者ではヘンリー、フォーセットの半身像が此處に在る筈であるのに、第一日目には其を見落してしまつた。二日目には是

Henry Fawcett
(1803-1884)
英國の經濟學者

フォーセツト

ダーウィン

Darwin
(1809-1882)
英國の生物學者

James Prescott
Joule
(1814-1889)
英國の物理學者

ジュール

非探し出したいと思つたが、容易に見つからぬ。それもその筈、往來止にしてある片隅の室の遙か奥の方に半身像が懸けてあるのであつた。併し遠くから薄暗い壁に懸けてある半身像を兎も角も認め得た位だから、悠々と此の寺院の内を逍遙ふことの出來ることも推して知るべきである。進化論で有名な彼のダーウィンの葬つてある其の床石の上でも、私は様々の事を思ひ浮べながら飽くまでも佇むことが出來た。ダーウィンの半身像の懸つて居るすぐ傍の壁には「エネルギー不滅の法則」を考へ出したジュールの爲の記念板がある。

此の牌はジェームス・プレスコット・ジュールを永遠に記念せんが爲結合したる諸國の人々によりて、茲にニュートン・ハッセル及びダーウィン等の墳墓に近く置かる。

James Watt (1736-1819) 英國の機 械學者 發明家	ワット	Herschel (1792-1871) 英國の天 文學者 物理學者	ハーシエル	Sir Isaac Newton (1612-1727) 英國の 數學者 物理學者	ニュートン
---	-----	--	-------	--	-------

と云ふ牌銘も、私は之を手帳に書きとめることが出来た。幾度か私の論文や著書に引用した蒸氣機關の發明者ジェームス、ワットの石像もある。ガウンを着て椅子に腰を掛け、左脚を後にひいて右脚を前に出し、紙を膝の上に展べ、左手に其の端を抑へ、右手にコムパスを握つて居る。臺石の表面を見ると、其には次の如き意味の文字が彫りつけてある。

此の國の國王、諸大臣並に貴族、平民の多くの者ども、此の記念像をジェームス、ワットのために建てたり。そは彼の名を永遠に傳へんとてには非ず。彼の名は平和の事業の榮ゆる限り、かゝる記念像を俟たずして永遠に傳はるべし。此の像は人間が彼等の最上の感謝に値する所の人々を尊敬することを知れりと云ふ證據を示すために建てたるものなり。

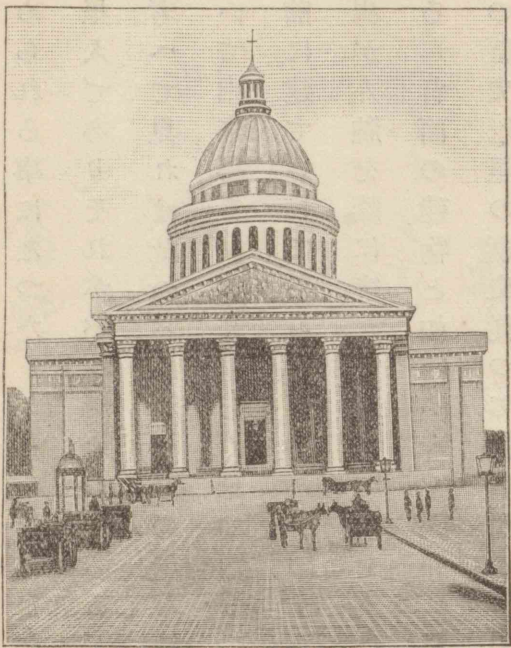
思ふに、彼の産業革命、延いて現代の物質的文明を人間化すれば、そこにジェームス、ワットの塑像が出来る。私は今親しく其の偉大なる塑像の前に立つて、彼の生涯を懐ひ、又産業革命の偉業を思うて、萬感の徂徠するに涙を催さんばかりである。記念像の下に彫りつけてある幾行かの文字も實にゆかしきものである。私は行を追うて丁寧^{ていねい}に其の文句を手帳に寫し取りながら、日本にも若しかゝる場所があるならば、私は子供等の教育のため屢々、そこへ連れて行きたいものだと思つた。

その後、私は巴里に移つて、パンテオンを見に行つた。こゝではその墳墓のある洞窟を見るのに、案内者に就かねばならぬ。時を定めて案内者が觀覽者を集める。其の時それについて入るのである。一人の案内者が何十人かの群を引連れ、薄暗い洞窟

Zola (1840—1902) 小説家	ゾラ 佛國の小説家	Hugo (1802—1885) 思想家	ユーゴー 佛國の思想家・詩人	Voltaire (1694—1778) 學者	ヴォルテール 佛國の文學者	Rousseau (1712—1778) 學者	ルソー 佛國の哲學者
----------------------------	--------------	----------------------------	-------------------	-------------------------------	------------------	-------------------------------	---------------

の中を出來得るだけ急ぎながら、只時折立ちどまつて若干の説明をするだけなので、一分間たりとも落ちついて英雄の墳墓を仰ぎ、追慕の念を催し、懐古の情に耽る暇がない。此がルソーの墳墓である。彼がヴォルテールの墳墓である、こゝにユーゴーが眠り、そこにゾラが眠つて居ると云ふかと思へば、はや先頭は他の場所へと進むので、何一つとして頭に残りやうが無い。もうおしまひだと見えて、そこに出口がある。戸の外に例の案内者が立つて居て、銘々から思召の金を貰つて居る。皆が金を遣ると、どうんと戸を閉めて錠を下す。それでおしまひである。次には復、何十人かの見物客を引連れて同じ事を繰返す。此の如くにして、案内者のポケットは相當に膨れるであらう。私は敢へて一法二法の金を惜しいとは思はぬが、何遍這入つても同じ

Marat (1741—1793) 命家	マラー 佛國の革命家	Mirabeau (1749—1791) 辯家	ミラボー 佛國革命時代の雄辯家
----------------------------	---------------	-------------------------------	--------------------



パンテオン

ことだから、巴里には七十日間も居たけれど、二度とは行かなかつた。此のパンテオンにはかつてミラボーが國葬された。然るに其の國葬が營まれてから僅か三年目に、議會では彼の骸骨を掘返して其の代りにマラーを葬ることを決議した。かくてミラボーの死骸は或夜、此のパンテオンから持ちだして或他の墓地に改葬された。マラーが暗殺された事は當

ロダン
Rodin
(1840—)
佛國の彫
刻家

時甚だしく巴里人の血を涌かしたものと見える。然るに此の
マラーの死骸も、三ヶ月目に又此處を追出されて、他の墓地に埋
められる事になつた。えらい事をしたものだ。併しそれが巴
里人であり、それがパンテオンである。
考へて見れば、此のパンテオンの墳墓はやはり例の案内者につ
いて、出來得るかぎり遽しく見て廻るべき場所なのである。堂
前に建てられてある「考へる人」と題するロダンの作品は、裸體の
男が左腕を膝に突き、掌を以て額を支へて居る銅製の巨像であ
るが、背面の建物と如何にも不調和に見える。併しパンテオン
の歴史、巴里の歴史、從つて佛蘭西の歴史を知る者にとつては、此
のロダンの作品こそ替へも動かしもならぬパンテオンの堂前
の闕くべからざる裝飾である。(祖國を顧みて)

頭光

本名岸誠之
寛政八年(西五〇)
歿
年七十

木端
栗柯亭
眞宗の僧
安永二年(西三〇)
寂

朱樂菅江
本名山崎景貫
寛政十年(西五七)
歿
年六十

二三 郭公

郭公

頭光

郭公自由自在にまゝ果は

・酒屋へ三里豆賣屋へ二里

絲瓜

木端

世の中は何のへちまと思へども

ぶらり〜は暮されもせむ

葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて

朱樂菅江

よそぎれと見ゆは法寺の飾一紙

四方赤良

本名太田覃

蜀山人

漢學者

狂歌師

文政六年(二四二)

歿

年七十五

郭公鳴きつる方

郭公鳴きつる方

をながむればた

だ有明の月ぞ残

れる(後徳大寺

左大臣藤原實

定)

宿屋飯盛

本名石川雅望

國學者

狂歌師

文政十三年(二四九

〇歿

年七十八

どもうもけきけり

早春 四方赤良

生疏の禮者浅見れば大道を

横まぢうへり

早嶺

早嶺が握りさづけ振りあそび

山の横つるけり風がふく

郭公に有明の月ぞ残る繪に

郭公鳴きつるあにけり

後徳大寺のありあきの顔

ことけりや

天地の

力をも入れずし

て天地を動かし

てりもせめ目に見えぬ鬼神

をもあはれと思

はしむるは歌な

り(古今集序)

下とは

鍾馗

唐の玄宗の夢に

現れて貧乏神を

祓つたといふ進

士

隨身

上皇大臣などに

供奉する近衛の

舍人

大臣には八人

歌人

宿屋飯盛

歌よみは下子そよされ天地の

動き出さずそよまふものは

一三 鍾馗

石川雅望



鍾馗 (周耕筆)

大臣と稱すれど

も隨身舍人も隨

へず。降魔の利

劍ありながら鎮

座せる社も見え

ず。顔に手足に

朱を濺ぎて、拔身

引窓
光線を探り又は
竈の煙を洩らす
ため引明け引閉
められるやうに
屋根へ作つた窓

福地櫻痴

名は源一郎

新聞記者

戯曲家

明治三十八年歿
年六十五

上野

東京市下谷區に
ある岡で今は大
部分公園となる
徳川將軍の廟所
寛永寺などがあ
る

谷中

上野の岡の續き

を取つて振舞はず。若し生醉かと見てあれば、櫛餅を引窓から
覗く。下戸か上戸か分くべからぬ文武兼備の進士の垂跡、げに
千早振紙幟、仰げば愈、軒に高し。(あづまなまり)

一四 尼法師

福地櫻痴

今年五月十五日、上野なる某院にては、彰義隊戦死の諸輩の爲に
二十七年忌の法會を修すと聞え、又谷中なる某寺にても同じ法
會を行はると聞えたり。余は彼の彰義隊とは初より方向を同
じうせざりしかば、其の諸輩とは關繫も薄く、加之余が當時の議
論は、キリシタンに彼の諸輩の怒を招きて、既に其の刃の霜ともせらるべ
き危難に遭ひたる事もありき。されどもそは過去の事にて、今

根岸の里
上野公園の北麓
下谷區の内
三河島
根岸の北
東京市の東北郊

は歴史上の物語とはなりぬ。などて露ほどの恨も懼も余が心
の底に残るべき。殊更かの諸輩は同じ様に幕府に仕へ、同じ様
に主家の事を思ひたる朋輩なり。其の方向を誤りたりと言は
ば言へ、三河育ちの徳川武士、飽くまで意地を張通すといふ氣象
をば先祖より承け継ぎたるは、旗本八萬騎の多かりける中に、此
の諸輩にぞありける。せめては今日の法會に値ひ、香華をも手
向けて彼の冥福を祈らんものをとて、午過ぐる頃より上野谷中
に詣て、形の如く其の法會を畢へて寺を出でけり。
初夏の時候とて日脚の永くして、まだ黄昏には三四時間もあり
ぬと覺えければ、此の序に山郭公の音づるゝをも聞き、卯の花の
咲出づるをも眺めばやと思ひ定めて歩を進め、根岸の里を打過
ぎ、たどるとも無く三河島の方へ赴きたり。一叢茂る森の

庫裏
寺院の臺所
轉じて住職の住
む處

中に古寺の屋根の樹間より見ゆるが何と無くゆかしく思はるるまゝに、畔道を近廻りして寺の門に入りて見たれば、元來大きからぬ本堂のなかば荒れて古さびたるに、住持の僧は庫裏にや居るらん、本堂を守る法師も見えざりけり。さはあれ此の寺の門に入りつる上は、争て其の本尊に禮を行はずしてよかるべきときつと思ひたりければ、恭しく賽錢の禮物を捧げ奉りて禮拜を行ひ、事の次に境内の縦覽を許させ給へと乞ひ、其の默許を得て、本堂の右手、樹木ある方へぞ進みたる。此の寺の繁昌なりし頃には庭園を好事に築きたりと見えて、藻草の生茂れる池も夏草の蔓れる阜も其の餘情を留めてなか／＼に見所あり。斯くて此の庭を通り過ぎて生牆の外に出てたれば、こゝは卵塔場と稱ふる寺内の墓地にて、其の檀越に然るべき家の存せるが

卵塔
卵の形をした圓
い塔
轉じて墓

地藏

天上界から地獄
界まであらゆる
六道の衆生を濟
度して後に成佛
するといふ菩薩

閻伽

Argha
供物
轉じて水

少なきと覺しくて、新しき墓石は其の數は稀にて、苔むしたる墓の碯のみ累々たり。然るに此の卵塔場の西の隅なる一樹の枿の木の下に竹の釘貫を結廻したる中に小さき土饅頭ありて、其の上に一個の地藏尊を安置したり。其の尊像の石も臺石もはや古色を帯びたれども、苔もむさず、傾きもせず、其の周圍に雜草一つ生さず、清らかに掃除して、今しも汲みたる閻伽の水にて尊像も土饅頭も淨め奉り、臺石の左右の花立には檜の葉を供へ、中央の香爐に線香をぞ焚きたりける。事の體一際目立ちて由ありげに見受けられたり。此の尊像の前に一個の尼法師、年の頃は四十七八歳にもあらん、姥櫻のはや老朽ちて、顔には皺の波を處々に寄せて見る影も無けれども、其の面容眉目の清らかなるを見れば、他目ながらも昔偲ばるゝ心地したり。肌には鼠木綿

の袷衣を着、墨染の麻の衣を身に纏ひ、香染の麻の袈裟を掛け、藁
蓆を敷き、端然として其の上に坐し、夕日の其の身を照して、焼く
が如くなるを更に心にも留めず、小さき折本の御經を、兩手に捧
げてしめやかに無量壽經を讀みたるが、節も亂れず、聲も澄渡り
ていと貴く聞えたり。

尼法師の後には二人の幼き子あり。一人は七八歳ばかりの女
子にて、縹はなは地に白く菊の花染出して、點々に紅緑の彩色したる袖
の袷衣を着て、紫縹はなは子に緋の板締縮緬を腹合せにしたる帶をや
の字に結び、髪は額を切下げて禿ハカにし、頂上に小さき銀杏返を結
ひたるが、面白く、口元しまりて、愛嬌を含みたり。今一人は五六
歳の男の兒にて、眼大きく、頬豊かにして、軀幹の肉も満ち、何さま
逞しき武夫の嫩葉とも見ゆるが、木綿袷の上に葛の袴を裾短に

板締
模様を彫つた板
の間に布帛を挟
んで固くしめて
地を染め模様を
白く現したるもの

着て、件の女子と共にいと大人しやかに、楓の如き手を合せて同
じ様に彼の地藏尊を拜み居たりけり。

事の體、何とは知られねども、由ありげに見えたるに、余は彼の尼
法師等の勤行の殊勝なるに感じ、妨げては悪しかりなと思ひ
料り、心附かれぬやうに去らばやとて、一旦は足早に前の生牆あ
る方へ歩を返したりけるが、さるにても後髪引かるゝ如き思を
生じて去りかねたれば、再び生牆の邊に身を寄せて暫く打見た
りけるに、彼の尼法師は讀經を終へて靜かに經を懷に納め、念珠
を押揉みて口の中にて佛名を唱へつゝ、尊像を仰ぎ拜しては兩
眼に涙を浮べ、絶え入るばかりの悲傷を幼兒等に見られんも恥
かしと思ひてや、衣の袖もて落つる涙を押拭ひ、後を振向きて二
人の兒女に向ひ、「いざ御別の禮拜せよ。」と誨へ、共々にぬかづきて

名残をしげに尊像の前を立ち、自ら水桶と蓆とを左右の手に持ち、兒女を伴ひて庫裏の方へ赴きたり。

余は此の尼法師の體いかにも仔細ある事と思ひたれば、例の好事心にて其の様子しやうしの聞きたき儘に、後に續きて庫裏に往き、親しく其の人に面會せまししやう、さらば住持の僧に逢ひて問はまし。」とは考へしが、否々いないな、さる無遠慮の舉動すべきにもあらず。」と思ひ反して、此の日はそのまゝ、我が家に歸りたり。さるにても此の一場の狀況は、兎角心に蟠りて、思ひ廻す程ますく、不審を積みたれば、遂に二日を経て十八日といふに再び彼の寺に赴き、住持の老僧に面會して彼の地藏尊の由來且は彼の尼法師の事を尋ねたるに、老僧ははたと膝を打ち、よくこそ御尋はなされたれ。いでや其の仔細つぶさに語り聞かせ參らせん。」とて説出していふ

慶應四年
この年九月明治
と改元す

東叡山
寛永寺
徳川將軍の廟所
もこゝにある



彰 義 隊 の 戦 争

やう、

「指折り數ふれば、はや二十七年の昔語とはなりて候。頃は慶應四年五月十五日の事なりしが、曉方より梅雨小歇なくて、何と無く心細く思はれたるに、正しく上野東叡山とういざんに當りて俄かに砲聲の烈しく聞えたり。何事ならんと打驚きて門外に走り出でて見れば、白き煙は森を隔て、彼處此處に立ち上り、其の上

修羅 戦役

Asura 修羅 梵語

人の叫び、鬨の聲喇叭の音、砲聲と俱に聞えたり。
 『すはや上野には合戦の始つたるぞや。御山に立籠れる彰義隊
 をば官軍が總攻にはしつるぞや。早う逃げよ。疾う走れよ。
 流弾に中つて怪我なせそ。』と、老弱男女の別なく我先にと轉びつ
 輾びつ西へ北へと逃走れる様は、思ひがけなき修羅の衢を唯今
 眼前に見る心地せられて、餘りの怖さ恐しさに、拙僧は急ぎ自ら
 寺門の扉を鎖固め、あはれ戦争の狼藉を免れさせ給へ。寺中に
 候人々の命の無事を守らせ給へ。』と本尊に願ぎ奉りて、事の果つ
 るを俟てる外に他事なく候ひき。扱も其の日の未下る刻に勿
 體なや東台の山門中堂本坊を始とし奉り、一山の堂塔伽藍みな
 劫火の爲に黒煙となりて炎上なし、見る目も空恐しくて候中に、
 落武者の後を追掛けて、彼方にては射て殺し、ぞ、此方にては打

つて取りしぞと門外にて往きかふもの、噂するが手に取る様
 に聞えたり。

かくて申過ぎたりと思ふ頃に、庫裏の後に當りて人の呻き惱め
 る聲の唯ならず聞えて候ひければ、愕く心を押靜めて、維僧を召
 具し、庭傳ひに覗ひて見れば、こは如何に、一個の武者の總身血に
 染み、痛手數多負ひて息も絶え、なるが裏手の牆根の隙を押
 破りて逃入りたりと見えて、松の樹の下に倒れ伏してぞ居たり
 ける。急ぎ寺男ども呼集めて彼の武者を引起させて介抱した
 るに、年の齡は二十五六歳ばかりなる若武者にて、日の丸の袖章
 つけたるは、聞ゆる彰義隊の一人とは知られたり。
 武者は苦しき息を吐きて、水一口賜へ。』と乞ひて寺男が與へたる
 茶碗の水をぐつと呑乾して、御情忝う候。』とてもの事に早く我

が首打つて此の苦痛を免れさせたまへ。といひたり。拙僧聞き
て、思ひ寄らざる事を宣はせ給ふものかな。法師の身にて争て
人の命を絶つ法やある。追手の來ぬ間に疾く／＼落ちさせ給
へ。と勧めたるに、彼の武者は首打振りて、否々、今日の合戦敗北の
上は、我が一命固より徳川の御家へ捧げ奉り候覺悟なれば、今更
何ちへか落ち候べき。但し名もなき陪臣どもに首を取られ徳
川家の砲兵組頭塙采女信繁をば何某の若黨が打取つたりと名
乗られんこと屍の上の恥辱なれば、心靜かに生害せんとて追取
卷きたる官軍の簇る中をたゞ一人にて打破り、根岸口より此處
まで落延びて候が、今は腹かき切らんにも痛手に心届かねば、此
の上の御芳志には御引導の御介錯を頼み參らせて候なり。苦
痛を救うて活すも、また殺して苦痛を免れさせるも、同じ佛の慈

芳志(之)のめいみ

介錯
けらと切つて
其の人の首を切る候

悲にてはおはさずや。誰にてもおはせ、いざ此の腰刀にて僕が
細頸落して給へよ。と望めども、介錯せんと答ふるものは一人も
候はざりき。『あな言ふ甲斐なき人々かな。さらば苦痛を忍び
て自ら生害いたし申さん。引導なして給はれかし。最後の様
の見苦しきとて嗤はせ給ふな。』と云ふまゝに、腰なる短刀拔持ち
て拙僧が授けたる十念を高らかに唱へ、己と咽喉にぐさと突立
て、がばと打伏し、人々が異口同音の念佛に導かれて其の儘に絶
入りたりけり。
『此の遺骸いかにすべき。市の廳へや訴ふべき、里正へや告知ら
すべき。いかゞはせん。』と一寺のもの打寄りて評議したりける
が、拙僧は人々に向ひて、此の塙某とやらん云へる武士が我が寺
の境内にて生害し、圖らずも我等が念佛の引導を受けて往生し

十念
臨終に十度念佛
すれば極樂往生
するといふより
起つた語

たるも、淺からぬ因縁ぞかし。然るを其の屍を曝させんこと罪業尤も深かるべし。後日に至り公の咎あらば、拙僧一人の身に引受けて如何なる御沙汰をも蒙らん。屍は境内の卵塔場に葬り埋めて、密かに回向供養こそ致すべけれ。と申したりければ、皆これに同じて、ともに力を合せ、其の夜の中に如法の沐浴せさせ、經帷子に着せ替へて棺に納め、讀經引導の式を密々に執行ひて後に、枋の木の下にそと葬りて其の遺骸を隠して候ひき。但し彼の武者が最後に至るまで着したる衣服鎖帷子、大小及び所持の品々は一つ櫃に納め、他日由縁の人に尋ね遇はゞ、交付申さんが爲に土藏の奥深き處に祕め置きて候ひき。老僧は澁茶を余に勧め、己も飲みて咽を濕し、更に物語を續けて曰く、

「明くれば同じき十六日の午頃、拙僧に面會を求むる一個の女性あり。座敷に招じ入れて對面したるに、其の人は十八九ばかりなる勝れて麗はしき女性なるが、單衣の裾高く端折り、胸高に帯引結びてり、しく扮装し、眼中血走りて半ば物狂しき顔色を顯したれども、自ら心を制してや行儀正しく初對面の挨拶をなし、詞靜かに拙僧に向ひて、卒爾にては侍れども、昨日此の御寺に落武者の參られて候はずや。と尋ねられたり。拙僧はつと打驚き、胸打騒ぎしかど、明らさまに云ふべき事ならねば、否々、さる事は候はず。と事も無げに答へたり。『否とよ、上人、御隠しあらんは罪深うこそ候へ。わらは、其の落武者の由縁の者にて候。彼の人の行方生死の程を尋ね究めんとて、今朝まだきより上野谷中根岸と彼方此方を尋ね廻りて此の邊まで參りて候ひしが、圖ら

栗形
下緒を通す鞘の
穴

ずも此の御寺の後の籬の外にて此の如く燧袋スイケを拾ひて候ひぬ。此の袋はわらはが手づから拵へて、彼の人の上野の御山に籠らせ給ひし時に短刀の栗形に紐もて結び附けたる品にては候なり。』とて燧袋を示して、『かゝる證據の候上は、隠させ給ふは中々に心細う覺え候。明したまへ。』とありければ、『さる證據の候上は、仕儀によりては打明くべきが、して其の殿の假名實名は。』うたてや御僧。』かの人の生死の程も知れぬ中に、彼の人の名乗を輕々しく申す者の候べしや。』げに尤の御答よな。さあらば、若しも其の殿官軍の爲に討たれ給ひぬと申さば如何に。』さこそは嬉しう覺え候はめ。討死は豫ての覺悟にて候ひつるものを。』雄々しき覺悟。天晴候。但し其の殿は拙僧が計ひにて、昨夜官軍の手に降參せられて候ぞ。』否々、彼の人に限りては力盡きて生

捕にせられたらんはいさ知らず、手を束ねて降參する程の腰拔武士にては候はず。但し討死し給ひしか。然らずば生害し給ひつらんは必定と存じ候。』さ宣ふ上は告げ參らせん。誠は昨日の夕この寺にて生害して果て給ひて候。』それは定にて候か。して其の證は。』御覽に入れ參らせん。』とて拙僧はやをら立つて土藏の中より彼の一櫃を取出して、其の中より肌着、太刀など二品三品取出して女性に見せたりければ、女性は兩眼に堰來る涙をば、血汐に染みたる彼の武者の記念の肌着にて拭ひ、顔に押當て、わつとばかりに泣入りしが、氣を勵まして、『覺悟の上とは申しながら、生害と承り、心紊れし拙き體を顯し、はづかしうこそ候へ。今は何をか包むべき、其の武士こそはわらはが二世までもと契りたる良人にして、しかも旗本八萬騎の其の中に三河御譜代の

家柄と知られたる塙采女信繁と申し、武士にて候ひしなれ。と明したり。

拙僧も此の上はとて乞はるゝ儘に、昨日落武者が最期の體ども落も無く物語りたりければ、女性は歎の涙に咽び、聲曇らせて、未練とも思召し給ふべきが、今生の別にせめて一度死顔を見させてたばせたまへ。と只管に頼みたり。一旦葬りたる死骸を再び掘發さんは佛家の戒と云ひ、且は憚ある事なれども、女性の心底の程も察したれば、其の夜深更に及びて寺男に吩咐けて密かに掘發して、其の死顔に對面を遂げさせて、此の世の名残を惜ませては候ひき。

女性が歎の中の喜は良人が最期の雄々しかりしこと、殊には臨終の砌に臨み、拙僧の引導に値遇して引接の悲願空しからず、攝

悲
拔き

4

上國の騷

慶應二年十月徳川慶喜大政奉還十二月大阪城に入る

伏見の敗

翌年正月三日慶喜入洛して伏奏しようとするのを薩長に伏見でくひとめられて大阪に退く

駿河臺

今神田區の内

取不捨の光明に黄泉の暗を照されて彌陀の淨土へ赴き給ふ事の有りがたさよと幾度とも無く伏拜みては泣き、泣きては伏拜み、再びもとの如くに葬りて後に庫裏に來り、さて拙僧に對ひて申されけるは、わらは、城戸主水光高とて三千五百石の知行を領せる旗本の二女にて、名をば兼と呼び、當年十八歳にて候。去年七月采女のもとにとつぎて候ひしが、間もなく上國の騷にて夫にて候ひし采女は十二月の初つ方より部下の兵士を率ゐて大阪に登り、伏見の敗に手を負ひて紀州路より江戸に歸り、其の後同志の人々と心を合せて彰義隊に加りて常に上野に籠りて候ひき。

去る十三日の夜、駿河臺鈴木町なる邸に歸り來り、わらはに對ひて、扱も徳川家の御代も今ははや限と覺ゆるぞ。上野に籠りて

いふやうな壺

二枚七枚。
いたづらに官軍を引受け、一戦に及ばんこと無謀の至、逆も勝利の算はある可からずと切に論じて諫むれども、同志の輩みな舉つて此の議に服せず、果は我をば操を變へたる臆病武者なりと嘲り、甚だしきは官軍の爲に二張の弓を引くものならんとまで疑ひ合へり。此の上は力なし、初よりして御家の爲に命を捧げんと疾くに覺悟を極めたる采女、明日にもあれ、明後日にもあれ、官軍より旗差向けられなば、眞先駆けて防ぎ戦ひ、太刀の刃の續かん程は、目に餘る寄手を引受けて切捲り、一陣全く落城に及ばば、潔く討死するか、さらば生害を遂げ、徳川武士の譽を後に留むべし。和御前は年若き身、殊に御父主水殿には官軍に降り、王臣となつて身の安泰を圖られたれば、氣遣あらじ。速かに實家に歸りて、情あらん人に見えさせ給へ」と申されたり。

「あな情なき御詞かな。如何ならん境までも同じ路をと契りしことは皆偽言にて候ひけるか。武士の討死、忠義の爲の御最期、などて未練に止め奉るべき。御後の御供養はわらはよきに計ひ奉らん。さりながら強ひての討死は武士の不覺とやら承りて候へば、必ずともに早まりて犬死なしたまひそ。胸の痛の碎くるばかりなるを押忍びて勇め勵まし參らせしが、覺悟の上とは云ひながら今生の愛別離苦にてこそ候ひしか。さる程に昨十五日の上野の戦争、良人の身の上如何ぞと心も心ならず、落城と聞くと其の儘に邸をそと駆出して上野までひた走りに走りつきたるに、官軍の兵士前後の門を取固めて入らせねば、せんかたなく取つて返し、今朝まだきより再び上野に參り、彼方此方に討死し給へる方々の死骸を見たれども、夫の形の見

えざれば、是までは辿りて候ひしなり。それにつけても、是なる唐の鏡は、わらはが最愛したる品にて候ひつるを、十四日の曉に夫の立出て給ひしとき、御身の護に候へば肌はだかに付けさせ置きたまへと奉りしを、最期の際まで持たせ給ひしこそ嬉しうは候なれ。とはいへ是が記念と成つたるか。と、流石に猛き女性も歎に前後の辨ワカも無かりけり。

其の後は此の女性七々日が間は忍びやかに毎日佛參して怠らず。中陰、百箇日の法會も人目に立たざる様に執行ひ、若干の黄金を持來りて、亡夫の石碑を建てんと乞はれたり。されども其の頃は朝敵たる賊兵の墓碣ボケ、明白しらべに建てんこと公への憚ありければ、わざと地藏尊の像を刻ませて標となし、亡き人の戒名は位牌いはいに記し、我が寺の過去帳にも書入れ、其の事の由は密かに書留

中陰
死後四十九日

木のふりかへ死んだ
人の戒名を記し
するもの

めて秘め置きて候なり。

かくて女性はその翌年亡夫の一周忌と申し、時に一人の孩兒こどもを懐かせて參詣なし、扱あつかも此の娘こそ亡夫の忘れがたみにて、昨年七月誕生いたして候なれ。夫が最期の砌に佛の道に入らばやとは存じ候ひしが、今日まで猶豫ちゅうぎひしは此の故にて候ひしぞ。とて、拙僧せつそうを請じて導師と頼み、十九歳と申し、に緑の黒髪をば煩惱ぼんごうの雲と共に切拂ひて、夫の實名と己の呼名とを合せて信兼尼とは法名を附けたり。

かくて其の後この尼法師の信兼尼は道德堅固に佛門の修行をなしたりければ、二十餘年の勤行にて、今は一宗の長老上人たちもをさし、及ばぬ程の碩學ロキカクとはならせられたり。東京におはする時は毎月三四回は墓參を怠らせ給はず。

記 記 千
す せ ず

偶、錫を飛ばして諸國を修行し給ふにも、五月十五日には必ず歸り來りて法の如く詣で給ふなり。足下が先の日に見給ひしは即ち其の尊き參詣にては候ひけるぞや。又その時に伴ひ給ひし兒女は、其の男兒は信兼尼の孫の某、その女兒は實家城戸某の娘、この兩家とも由縁の人々は少なく成りゆきて、今は此の男女二人のみ残りて是も尼が養ひ育て給ふなり。右は老僧が長々の物語なり。此の尼法師の身の上及び二人の兒女を尼が育める事に就きて猶聞きたる物語もあれど、茲には記さず。尼が今の住居かつは三河島の寺の名も顯に記すは尼の意に悖る恐ありと老僧が止められたる故に、余も其の意に従ひて言はず。唯この尊き尼法師の貞節を記すに筆を止むるなり。(江山烟雲)

兼好法師

吉田兼好
本姓卜部
觀應元年(1010)
寂
年六十九
仁和寺
山城國葛野郡御
室寺にある古い
寺
京都の西一里
石清水
男山の八幡宮仁
和寺より西五里
極樂寺
男山の麓にある
寺
高良
男山の麓にある
末社

一五 先達

兼好法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水ををがまざりければ心うくおぼえて、或時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良などををがみて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、年頃思ひつること果しはべりぬ。聞きしにもすぎて貴くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしは何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ參るこそほいなれと思ひて、山までは見ずとぞいひける。少しの事にも先達はあらまほしき事なり。(徒然草)

一六 醉興

兼好法師

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名残とて、各あそぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻をおし平めて舞ひいでたるに、満座興に入ることかぎりなし。

暫し奏でて後、抜かんとするに大方抜かれず。酒宴事さめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて、血垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすくわれず、響きて堪へ難かりければ、叶はて、すべき様なくて、三足なる角の上に帷子を打懸けて、手を引き、杖を突かせて、京なる醫師がりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見ることに限なし。



浮田一蕙筆(國華)

醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有様、さこそは異様なりけめ。物をいふも、くゞもり響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。」といへば、また仁和寺に歸りて、親しき者、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立て、引きた

まへ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔て、首もち
ぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。辛き
命まうけて、久しく病み居たりけり。(徒然草)

一七 最明寺入道

兼好法師

平宣時朝臣老の後、昔語に、最明寺入道、或宵の間に呼ばる、事あ
りしに、^{アセラミ}やがて、と申しながら直垂の無くて、とかくせし程に、また
使來りて、^{吾兄臣}直垂などの候はぬにや。夜なれば異様なりとも疾く。
とありしかば、^{兼好法師}萎えたる直垂うち、のまゝにてまゐりしに、銚
子に土器取添へてもて出でて、この酒を一人たうべんがさうざ
うしければ申しつるなり。下物こそ無けれ。人は静まりぬら

アセラミ
吾兄臣
兼好法師
平宣時
大佛氏
北條時政四世の
孫



(藏寺壽萬都京) 頼時條北

ん、さりぬべき物やあると、何處までも求めたまへ。とありしかば
紙燭さして、くまぐを求
めし程に、臺所の棚に小土
器に味噌の少しつきたる
を見出でて、これぞ求め得
て候。と申し、かば、事足り
なん。とて、快く數獻に及び
て興に入られ侍りき。その代には斯くこそ侍りしか。と申され
き。(徒然草)

一八 兒なくらむ

山上憶良

山上憶良
奈良時代の歌人
天平五年(733)
歿
年七十四

僧正遍昭
長岑宗貞
六歌仙の一
寛平二年(丑〇)
寂
年七十六

おくらゝは今はまからむ兒なくらむ
そのかの母もわを待つらむぞ。

僧正遍昭

菅原道真母
年七十六

たらしねはかゝれとてしもうばたまの
わが黒髪を撫てずやありけむ。

菅原道真母

藤原兼輔
平安時代の歌人
承平三年(丑三)
卒
年五十七
小式部内侍
平安時代の歌人
橘道貞の女
母は和泉式部

人の親の心はやみにあらねども、
子をおもふ道にまどひぬるかな。

小式部内侍

小澤蘆庵
京都の歌人
享和元年(丑六)
歿
年七十九
松平定信
奥州白河の城主
和漢學者
文政十二年(二四
八)卒
年七十二
良寛
越後の歌僧
天保二年(二五九)
寂
年七十四
加納諸平
和歌山の歌人
安政四年(三五七)
歿
年五十二

いかにせむいくべき方もおもほえず、
親にさきだつ道を知らねば。
父母のたびなるわれをおもふらむ、
まつらむさまのおもかげに見ゆ。
うづみ火のあたりのどかにはらからの
まとゐせし夜ぞこひしかりける。
霞立つ長き春日を子供らと
手毬つきつゝこの日暮しつ。

小澤蘆庵
松平定信
良寛
加納諸平

大隈言道
筑前の歌人
明治元年歿
年七十一

あげまきがうかるゝ聲も面白し、

ふれく、小雪、山つくるまで。

大隈言道

歸り來てねたる童の袂より、

こぼれいでたる花莖かな。

北原白秋
名は隆吉
歌人
詩人
明治十八年福岡
縣柳河町生

一九 童心

北原白秋

越後の良寛禪師は童心の持主であつた。一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好きであつた。これで見ても良寛様がどんなに子供が好きであつたか、思ひやられる。その良寛様も子供たちには随分馬鹿にされて、盛んに愚弄アソビられた

りアソビ擲カケ揄カケはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で子供と一所懸命に遊び惚れてゐた良寛様が有難い。



良寛

或時、例の通り、子供達とかくれんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛様が目を瞑つて、もういゝよ。といふかはいゝ聲を一心に待受けてゐられる。と丁度日のくれどきて子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちら／＼と点き出すと、子供達は急に遊びをやめて一人残らずこそ／＼と歸つて了つた。そこは子供だから良寛様も何もうつちやかしてである。無論、

いくら待つてももういゝよといふ者はない。その内に日が暮れ、長い夜が来た。さうして到頭夜が明けて了つた。良寛様はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つてやはり同じ處に同じ姿した儘、もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

また或時のことである。良寛様が今度は隠れる事になつた。そこで見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻叢の中にもぐり込んで、それはかはいらしいことだ、それはくく小さくなつて、まるで二十日鼠見たいに頭からすつぽりと稻藁をかぶつておどくくしてゐた。すると子供たちはまた例の通り一人残らずこそくくと歸つて了つたのである。それを良寛様は少

しも御存知がない。また日が暮れて夜が来て、また夜が明けた。稻叢には霜がまつしろに置き、朝の日のぼり始めると、百姓がやつて来て、何の氣もなく稻たばをやにはにはづすと、「おやつ。」と驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつてゐられる、「おや良寛様が。」と云ふと慌て、静かにしろ、静かにしろ、子供が見つける。「その心のあどけなさ、ありがたさ。まるで子供である。」

或日、その良寛様が男の子や女の子達とおはじきをしてゐられた。沙門良寛全傳に、禪師頗る大勝を博して賭物の熬豆を多く得。」と書いてあるから、餘程の乗氣であつたらしい。丁度その時誰かゝ入つて来た。そして、「おやくく良寛様、なかくくあなた様はおはじきがお上手で。」と褒めると、罪のないこと、良寛様はほう

つと面を赤くして、まるでおぼこ娘見たやうに、さもく恥かし
さうにそつとその熬豆を膝の下に押しかくしたといふ。
その心の初々しさ。そのきまりのわるさ、恥かしさは全く佛の
前に子供らしくおとなしく身をへりくだる心である。尊い聖
心は凡てこの童心を源にする。

禪師がいかに天真爛漫であつたか、もう一つお話する。

或時、赤々と實が熟れて鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子
供が一人泣いてゐた。良寛様を通りかゝつて、「どうしたんだ。」
と圓い頭をさすつてやると、「あの柿が食べたい。」と云ふ。「よしよ
し、それではわしが取つてあげる、泣くんでないぞ。」と云ひながら、
やつとこさと木に匍ひあがつた。枝につかまつてあれかこれ

かと探してゐるうちに、それは全くうまさうな柿の實だ、一つ取
つて口をつけると、それがおいしいのなんの、良寛様は夢中にな
つて、かじるはかじるは、まるで猿蟹合戦の赤いお猿のやうにむ
しや／＼と食べ惚れてゐる。下にゐる子供こそあはれてある、
それを見て火のやうに泣き叫ぶと、始めて良寛様氣がついた。
さあ、しまつた、これはといふので、慌て、枝をゆすぶつたといふ
お話。

思うてもその慌てかたのをかしさ、罪のなさ、真正直さ、その子供
らしさ、まつたく涙がこぼれるほど嬉しいではないか。

禪師の玉の様なこの童心は榮藏と云つた童の昔その儘である。
それは何ものにも代へ難い、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまたく叩かれた。「親を睨むやうな奴は、鰈になるぞ。」これを聞いた良寛様の榮坊は外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配であちらこちらと捜しまはると、ある濱邊の岩の上に、悄然と佇んで沖の方ばかり眺めて居た。「榮坊、どうした。」と云ふと、榮坊曰く、「俺まだ鰈にならないか。」

鰈になると云はれたので、ほんとに鰈になると思つて、一心に海を凝視めて顫へて居た童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。(洗心雜話)

立てば立つて入ればすぢ
 入る鰈同とほとけ思
 小とて大やあるらん
 伴のち支屋であらうも

蝶

二〇 旅行

山路愛山

山路愛山
 名は彌吉
 評論家
 江戸生
 大正六年歿
 年五十四

白河の關
 都をば霞と共に
 立ちしかど秋風
 ぞ吹く白河の關
 (能因法師)

風水相撃ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我の中に住むべきなり。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は自然の光景に觸れて、始めて感興涌出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れる歌人もありき。而も是自然の神髓に達すべき道には非ず。自然は唯質問を發するもののみ答辯を與へ、來りて見るもののみ教訓を與ふるものなり。

試に千山萬水を跋渉し、而して後首を回らして故郷を見よ。如何なる感情の此の間に生ずべきか。幼時より爛熟したる某山某水は始めて遙かなる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なくして飛ぶ雲も夕日も波濤も人をして故郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も故郷の方の天とし云へば大いに詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して自然も亦其の態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。今朝杖底の千岩は即ち亦明日天邊の寸碧なり。甕中に在る者は甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在り、始めて甕の全形を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。

我は嘗て蜻蜓を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき、溪流

あつふまふしかつたり
とむかひかふ。
位置と境遇
とを異にせる我は始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客観的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みて而も我に感興を與へざりし自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て最も味あるものに非ずや。

放翁
宋の陸游
詩人

に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。其の岸に垂れたる楊柳、其の野に咲きたる杜鵑花、我は毫も其の奇なるを感ぜざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と境遇とを異にせる我は始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客観的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みて而も我に感興を與へざりし自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て最も味あるものに非ずや。

舟に棹さして長き川を下れば四山の面目畫屏の如く、時若し夏の初ならば、さつき霧島紅の雨を降らし、時もし秋ならば、兩岸の蘆荻風に鳴る。時々刻々に變化する光景人をして知らず覺えず自然の吸引する所たらしむ。若しくは放翁の歌へる如く、山

桃源
支那湖南省常德府にある村
秦の亂を避けて隠れた人たちの栖む處といふ

重水復疑無路、柳暗花明又一村。前面に鬱々たる山あり、舵手棹を暗中に揮ふ、前途既に窮するが如し。忽ちにして山廻り、天濶く、雞犬聲あり、田畝開け、桃源一村人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。此の時此の情景して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら、覺むるが如く眠るが如く、有るが如く無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを楽しむが如き、如何に没風流の徒と雖も終に黄金以外眞の娛樂あることを知るに至るべきなり。朝まだき旅立すれば、駒の歩に連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙後に翹き、清爽の氣身を襲ひ、残月彼方の山の端にかゝり、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗とが地歩を争ふが如き、又微雨の蕭々たるに歴史ある古寺を訪へば、蝸牛壁に紋を

夏草や
芭蕉翁の句

畫きて自ら多年風雨の侵蝕せるを示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を弔へば、
夏草や、つはものどもが夢のあと。
何とも名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、是皆旅行に非ずんば得べからざるものにあらずや。

羽蟻
與謝蕪村の句

羽蟻飛ぶや、富士の裾野の小家より。
一面の平湖鏡の如き浮島ヶ原、其の南を縫へる松林の東海道、總べて是一幅の畫圖なり。春天穩かにして、富士嵐到らず、空氣は漣波だになき水に似たり。忽ち見る羽蟻の飛ぶを。靜中纔かに動あり、駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。是豈一室に坐して冥想する者の解し得る所ならんや。
旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖づきて五

千尺以上の高山に上り、而して下界を見よ。數個の山脈は蛇の如く邑を圍み、州を隔て、營々たる人間恰も蟻蛭の如くに見ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山河の配置自ら天命を示せり。

偶感

高行稟論本衆愚心

怪乘政客多糊塗

中流屹立吐虹氣

則是人間大丈夫

愛山逸氏

偶感
高稱稟論一本衆愚、怪來政客多糊塗。中流屹立吐虹氣、則是人間大丈夫。愛山逸氏

蹟筆山愛

たり、項は亡びたり、シーザーは生れて死したり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡の山川與城郭、漢々同一形。市人與

乾坤大なりといへども悟了すれば浮動の原素に過ぎず。原子と原子と相撃ち相觸れ、糾紛錯綜したる混沌の状態たるに過ぎず。劉はおこり

東坡
宋の蘇軾
詩人
文人

天つ空
源賴政の歌

鴉鵲、浩々同一聲と歌へるは眞なり。故に山に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐する者は即ち哲學の講壇に坐する者なり。人は永久無限を慕ふ者なり。人の此の世に於ける境界は有限なり。而れども彼は無限の中に姪まれたる者なるが故に、無限は其の欲望なり。雲雀よりも高き峠に息らひて身を雲の中のとなし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山のあなたにも國あり、はるかなる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ雲ひとつに見ゆるこしの海の

浪をわけてもかへるかりがね。

天青くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住むべき

舎多きかな。人間豈塵界の爲に繩しづせらるべけんや。此の意義に於て自然は人をして無限ならしむるものなり。是旅行より學び得たる自然の教訓に非ずや。(愛山文集)

上田敏

英文學者
文學博士
京都帝國大學文
科大學教授
大正五年卒
年四十二

二 汽車に乗りて

上田敏

赤松の林をあとに、
汽車はいま堤にかゝる。

麻島ひだりに見つゝ、

ほのかなる水のにほひに、
三稜草みくろくさ生ふる河原に、
鶺鴒きりぎりすこそ夏は來らね、

河淀の近きはしるし。
葦切アサはけゝしと噪さわぎ、
たま〜に百舌ヒメツバメの速すみ贄、

籠鷲ヘミツツキは何をか思ふ、

しよんぼりと睨アヤに立てり。

紡績の宿にやあらん、
杼の音へだたりゆけば、
鐵道の踏切近く、

きり、はたり、はたり、ちようく、
道祖神みちのすけまつるあたりか、
繩帶しづなの檻かご褌はかまのころも、

飾磨
播磨國飾磨

かち色は飾磨の染か、
浅茅生の末黒すくもに立ちて、

乳吞子ちちのみを負へる少女は、
「萬歳」と囃はやし送りぬ。

萬歳はなれにこそあれ、
人の世に尊きものは、
偽の市にすまへば、
養をかきたる人も、

幾年を生きよ、里の子。
土の香よ、國の御魂よ。
産土の神にさかりて、
埴安はにやすの郷のつちより、

生えぬきのなれに呼ばれて、本然の命にかへる。

道芝の上吹く風よ、農人の寢覺に通ふ、

微かなる土のおとづれ、なつかしき母の聲あり。

晝さがり草の香高く、松脂のほひまじりて、

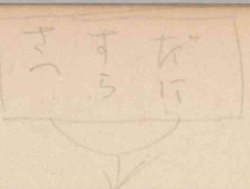
地の胸の乳房に溢る。蘇門答刺の香も及ばじ。

蘇門答刺の香
六國香の一
スマタラ島より
出る香木

忽ちに鐵のほひす、鳴神の落ちかゝるごと、

汽車はいま橋に轟く。桁構眼路をかぎりて、

ひとり見る蛇籠の礫。あやめ草



三 戯作三昧

芥川龍之介

瀧澤馬琴
名は解
小説家
曲亭馬琴と號す
嘉永元年(一五八)
歿
年八十一

芥川龍之介
文學者
明治二十五年
東京生

華山
渡邊登
憂國者
畫家
天保十二年(一五〇)
自殺
年四十九

華山が歸つた後で、馬琴はまだ残つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿を續けるべく平生のやうに机へ向つた。先を書き續ける前に昨日書いた所を一通り讀返すのが彼の昔からの習慣である。そこで、今日も彼は、細い行の間へべた一面に朱を入れた何枚かの原稿を、氣を付けてゆつくり讀返した。すると、何故か書いてあることが自分の心持とびつたりしない。字と字との間に不純な雑音が潜んでゐて、それが到る處で全體の調和を破つてゐる。彼は最初それを彼の癪が昂ぶつてゐるからだと解釋した。

「今の俺の心持が悪いのだ。書いてあることは、どうにか書切れる所まで書切つてゐる筈だから。」

さう思つて彼はもう一度讀返したが、調子の狂つてゐることは前と一向變りがない。彼は老人とは思はれないほど心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうかだらう。」

彼は其の前に書いた所へ眼を通した。すると、これも亦徒に粗雑な文句ばかりが雜然として散らかつてゐる。彼は更に其の前を讀んだ、さうしてその前の前を讀んだ。

しかし讀むに従つて拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。そこには何等の映像をも與へない敘景があつた、何等の感激をも含まない詠嘆があつた、さうして又何等の理路をも辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書上げた何回分かの原稿は今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌とし

弓張月

鎮西八郎爲頼の
一生を叙した小

説
三十卷

南柯夢

人情小説
十四卷



瀧澤馬琴

か思はれない。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感じた。
「これは初から書直すより外はない。」

彼は心の中で斯う叫びながら、忌々しさうに原稿を向ふへ突きやると、片肘ついて、ころりと横になつたが、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼は此の机の上で「弓張月」を書き、「南柯夢」を書き、さうして今は「八犬傳」を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、臺の形をした銅の水差、獅子と牡丹を浮かせた青磁の硯屏、

それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さう云ふ一切の文房具は、皆久しい以前から彼の創作の苦みに親しんでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな忌はしい不安を禁ずることが出来ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると人竝に己惚の一つだったかも知れない。」

かう云ふ不安は、彼の上に何よりも堪へ難い落莫たる孤獨の情を齎した。

彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には常に謙遜であることを忘れるものでない。が、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩

遼東の豕

遼東有豕、生

子白頭、異而獻

之、行至河東、

見群豕皆白、

懷慙還。

(後漢書)

に對しては、傲慢であると共に飽くまでも不遜である。その彼が結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたと云ふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたと云ふことを、どうして易易と認められよう。而も彼の強大な、我は「悟り」と「諦め」とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破船の船長のやうな眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひ續けた。若し此の時、彼の後の襖がけたゝましく開け放されなかつたら、さうして、お祖父様唯今。」と云ふ聲と共に、柔かい小さな手が彼の頸へ抱付かなかつたら、彼は恐らく此の憂鬱な氣分の中に何時までも鎖されてゐたことであらうが、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供だけが持つてゐる大膽と率直とを

以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よく飛上つた。

「お祖父様唯今。」

「お、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に「八犬傳」の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな喜が輝いた。

茶の間の方では、痛高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が、賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から悴の宗伯も歸り合はせたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅
少し濃い栗色

栗梅の小さな紋付を着た太郎は、突然かう言出した。考へようとする努力と笑ひたいのを怵へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日？」

「御勉強なさい。」

馬琴は到頭噴き出した。しかし、笑の中ですぐ又語を繼ぎながら、

「それから？」

「それから、えゝと癩癩を起しちやいけませんつて。」

「おやく、それきりかい。」

絲鬢奴
頂を廣く剃り左
右の鬢の毛だけ
を結んだ奴

「まだあるの。」

太郎はかう言つて、絲鬢奴の頭を仰向けながら、自分も亦笑ひ出した。眼を細くして白い齒を出して、小さな鬢を寄せて笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて世間の人間のやうな憐むべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんなことを考へた。さうして、それが更に又彼の心を擽つた。

「まだ何かあるかい？」

「まだね、いろんなことがあるの。」

「どんなことが？」

「えゝとお祖父様はね、今にもつと偉くなりますからね。」
「偉くなりますから？」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつと、もつと、よく辛抱なさいつて。」

「誰がそんなことを言つたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た、さうして笑つた。

「だあれだ？」

「さうさな、今日は御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げなが

ら、頭を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の観音様がさう言つたの。」

かう言ふと共に、この子供は家内中に聞えさうな聲で嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに急いで彼の側から飛退いた。さうして、うまく祖父をかついだ面白さに、小さな手を叩きながら轉げるやうにして、茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心中に嚴肅な何物か、刹那に閃いたのは此の時である。彼の脣には幸福な微笑が浮んだ。それと共に、彼の眼には何時か涙が一杯になつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は

刹那

梵語

Ksana

極少時間

芳流閣

足利成氏の古河城にある三層樓といふ

禍福は糾ふ纏

禍之與福兮何異糾纏（漢書）

人間萬事

人間萬事塞翁馬、推枕軒中聽雨眠。（元僧照晦樓）

禍は福の倚る所

禍兮福之所倚、福兮禍之所伏、孰知二其極。（老子）

又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所でない。この時の孫の口からかういふ語を聞いたのが不思議なのである。「観音様がさう言つたか。勉強しろ癩癩を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」六十何歳かの老藝術家は涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。（傀儡師）

二三 芳流閣上の奮闘

瀧澤 馬琴

古の人謂はずや、禍福は糾ふ纏の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。それは福の倚る所、將禍の伏す所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極を知らん。

犬塚信乃

八武士の一人

名は成孝

孝の字の玉を有

古河

下總國結城郡古

河町

古河公方足利成

氏の居つた處

村雨

信乃の父犬塚番

作が成氏の兄春

王より預つた名

刀

信乃の知らぬ間

に悪漢にすりか

へられたもの

犬飼見八

八武士の一人

信の字の玉を有

憐むべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心にしめつ身につけつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、はるく古河へ齎して、名を揚げ、家を興すべかりしその福は禍とふり變りたる村雨の刀は舊の物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし。憾をここに釋く由もなく、事急にして、意外にあり。纔かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に登れども、とにかくに脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる心の中はいかなりけん、想ひやるだにいと痛まし。されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあらずし、月來獄舎に繋かれし禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて、怒に擇み出されつ。他の憂を身の面目に今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて

史記録

浮圖(寛正) 塔寺併

成氏朝臣

古河公方足利成

横堀史在村

成氏の老臣

許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熱をわたる敷瓦は凸凹隙なく、波に似て、下には大河滔滔たるこゝ、生死の海に入る流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫を絶え、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれつなぎとめんと、颯の樹傳ふ如くさらくと登りはてたる三層の屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、瞰まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の狙ふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし床几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦只閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、鎗長刀を晃かし、或は箭を負ひ弓杖突立て、組

三寸不律

三才
天地人

三支
詩琴酒

三冬
冬三三有向

三販

三眞
眞眞眞

三眞
眞眞眞

墨氏
墨翟
周代の人
宋に仕ふ

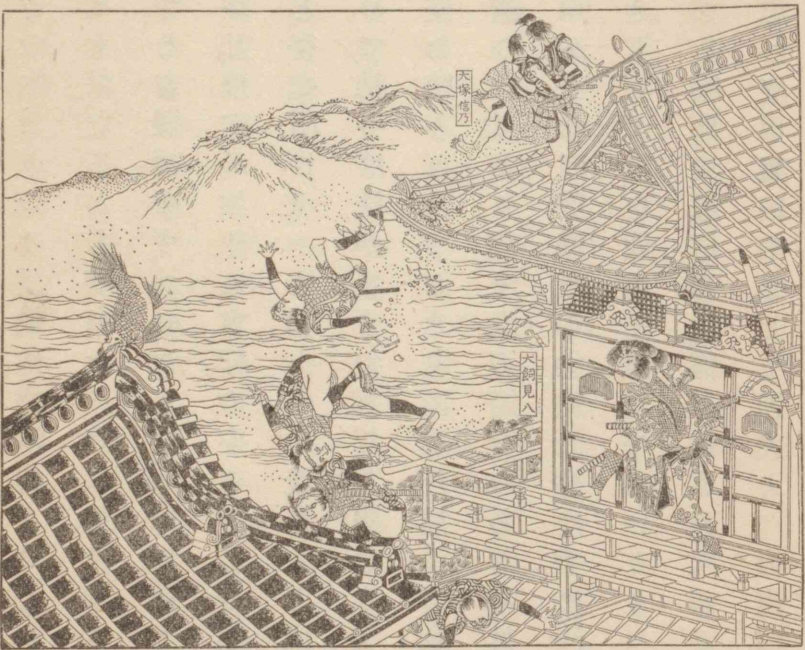
魯般
公輸般
周代の人
楚に仕ふ

膳臣巴提便

飲明天皇七年百
濟に使したとき
虎穴に入つて虎
を刺殺す
富田三郎
和田義盛の士
源實朝の面前で
長三尺七寸の大
鹿角二個を一度
に折る

んで落ちなば撃ちとめんとて、項を反らして之を觀る。加之外
のかなたは、綿連として杳かなる河水遶りて砌を浸せば、たとひ
信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶
を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲梯なれば地
上に下るべくもあらず。渠鳥ならねど、羅に入りぬ、獸ならねど、
狩場に在り。三寸息絶ゆれば、事みな休まん。脱れ果てじと見
えたりけり。

その時、信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで追ひのぼらんとせ
し兵等を斫りおとしつる後は絶えて近づく者なきに、今唯ひと
り登りきぬるはよに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴
提便が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂きたる
力あるか。遮莫一個の敵なり、ひつ組んで刺しちがへ、死するに



芳流閣上の奮闘 (傳犬八見里總南)

難きことやある。よ
き敵ござんなれ、目に
物見せん。と、血刀を袴
の稜もて推拭ひ、高瀬
のごとき方桴に立つ
のたるまゝに寄するを
俟てば、見八も亦思ふ
やうかの犬塚が武藝
勇悍固より萬夫不當
の敵なり。さりとして
も、搦めかねて他の援
を借ることあらば、獄

舎の中よりこの役儀に擇み出されしかひもなし。からめとるとも、撃たるとも勝負を一時に決せんものを。と思ひにければ、ちつとも擬議せず、御誼さふ。と呼びかけて、持つたる十手をひらめかし、飛ぶが如くに方桴カタヅの左の方より進み登りて、組まんとすれど、寄せ附けず。心得たりと鋭き太刀風に撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさず打込む刀尖ヤサをさへて流す一上一下、迂る躑を踏みとめてしきりに進む捕手の祕術、あなたもおとらぬ手練の働、嵩より落す太刀筋をあちこち外す虚々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主従、士卒は手に汗握らざるもなく、また、きもせず氣を籠めて見るめもいとゞはるかなり。さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣いやまして刀尖より火出づるまで寄せては返す太

刀音かけ聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風起り、二龍青潭に戦ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹か、と見るばかりなるいと高き閣の棟のうへに死を争ひし爲體たゝみ、よに未曾有の晴業なれば、見八が被籠かこもの鎖、肱當の端を裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かて、初に淺痕を負ひしより次第に疼みを覺ゆれども、足場を守りて撓まず、去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受流して、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に眉間を望みて礮と打つ十手を丁と受けとむる信乃が刃は鏗際より折れて遙かに飛びうせつ。見八得たりとむずと組むを、そがまゝ左手に引着けてかたみに利腕しかととり、振ち倒さんとえいごゑあはして揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏ら

して河邊の方へころ／＼と身をころばし、覆車の米苞坂より落すに異ならず。勾配けはしき棧閣かたがはに削りなしたる臺の勢、とどまるべくもあらざめれど、かたみにとつたる掌を緩めず、幾十尋なる屋の上より末遙かなる河水の底には入らて、程もよし、水際に繋げる小舟の中へうちかさなりつゝ、どうと落つれば、傾く舷へらと立つ浪にざんぶと音す水煙、纜ちようと張りきつて射る矢の如き早川の直中へ吐出されつ。しかも追風と退く潮に誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。(南總里見八犬傳)

二四 橋辨慶

シテ詞、是は西塔のかたはらに住む武藏坊辨慶にて候。我宿願の

前ジテ辨慶
後ジテ同
トモ 從者
子方 源牛若
處 京都
時 六月
西塔 比叡山の西塔

五條の天神
京の五條の通に
ある天満宮
丑の刻
午前二時頃

仔細あつて、五條の天神へ、丑の時まうでを仕候。今日満參にて候程に、唯今參らばやと存候。如何に誰かある。

トモ詞、御前に候。シテ、五條の天神へ參らうずるにてあるぞ。其の分心得候へ。トモ、畏まつて候。又申すべき事の候。昨日五條の橋を通り候處に十二三ばかりなる幼きもの小太刀にて切つて廻り候は、さながら蝶鳥の如くなる由申候。まづ、今夜の御物詣は、思召し御止りあれかしと存候。シテ、言語道斷のことを申すものかな。たとへば天魔鬼神なりとも、大勢にはかなふまじ。おつ取りこめて討たざらん。トモ、おつ取りこむれば不思議にはづれ、敵を手元に寄せ付けず。シテ、手ぢかく寄れば、トモ、目にも、シテ、見えず。地、神變奇特不思議なる化生のものに寄せ合せ、かしこ御身討たすらん。都廣しと申せども、是程の者あらじ。

げに奇特なる者かな。」

シテ詞「さあらば今夜は思ひ止まらうずるにて有るぞ。いや、辨慶ほどの者の聞逃げは無念なり。今夜夜更けば、橋に往き、化生の者を平らげんと。」地「ゆふべ程なく暮方の雲の氣色も引きかへて、風すさまじく更くる夜を、遅しとこそは待居たれ。」

牛若「さても牛若は母の仰の重ければ明けなば寺へ上るべし。」

今宵ばかりの名残なれば、五條の橋に立出でて、川波添へてたちまちに、月の光を待つべしと。」一聲「ゆふ波の氣色はそれか、夜嵐の夕べ程なき秋の風。」地「面白の氣色やな、そゞろ浮立つ我が心。波も玉散る白露の夕顔の花の色、五條の橋の橋板をとゞろくと踏みならし、音も靜かに更くる夜に、通る人をぞ待居たる。」

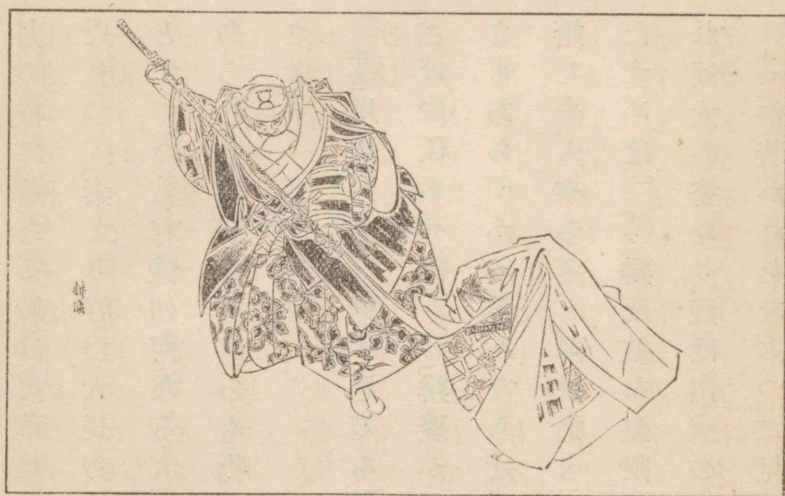
シテ詞「既に此の夜も明方の、山塔の鐘もすぎまの雲の光かゞやく

夕顔
源氏物語に五條
あたりに夕顔の
花咲きたる宿の
話がある

月の夜に、着たる鎧は黒革のをどしにをどせる大鎧、草摺長に着なしつゝ、素より好む大長刀、眞中取つて打ちかづき、ゆらりくと出でたる有様、如何なる天魔鬼神なりとも面を向くべきやうあらじと、我が身ながらも物だのもしうて、手に立つ敵のこひしさよ。」

牛若「川風もはや更け過ぐる橋の面に、通る人もなきぞとて、心すごげに休らへば。」シテ「辨慶かくともしら波の立寄り渡る橋板をさもあらゝかに踏みならせば。」牛若「牛若彼を見るよりも、すはや嬉しや、人來るぞと、薄衣猶も引きかづき、かたはらに寄りそひたたずめば。」シテ「辨慶彼を見附けつゝ、言葉をかけんと思へども、見れば女の姿なり、我は出家の事なれば、思ひ煩ひ過ぎて行く。」

牛若「牛若かれをなぶつて見んと、行違ひさまに長刀の柄元をは



つしと蹴上ぐれば、シテすは痴者よ、物見せんと、地長刀やがて取直し、いで物見せん手並の程と、切つてかゝれば、牛若は少しも騒がずつゝ、立ち直つて、薄衣引きのけつゝ、静々と太刀拔放つて、つゝ支へたる長刀の切先に太刀打合せ、つめつ開いつ戦ひしが、何とかしたりけん、手元に牛若寄るとぞ見えしが、たゞみ重ねて打つ太刀に、さしもの辨慶合せ兼ねて、橋桁を二三間

しきつて肝をぞ消したりける。あら物々し、あれ程の小姓一人を切ればとて手並にいかで洩すべきと、長刀柄長くおつ取りのべて、走り懸つてちようと切れば、背けて右に飛びちがふ。取直して裾をなぎ拂へば、踊りあがつて足もためず、中を拂へば頭に地に付け、ちゝに戦ふ大長刀、打落されて力なく、組まんと寄れば切拂ふ、すがらんとするも便なし。せん方なくて辨慶は、希代なる少人かなとてあきれはて、ぞ立つたりける。

ロンギ地不思議や、御身たれなれば、まだいとけなき姿にて、かほどけなげにましますぞ。委しく名乗りおはしませ。牛若今は何をか包むべき。我は源牛若。地義朝の御子か。牛若扱汝は。地西塔の武藏辨慶なり。互に名乗合ひ、降参申さん、御免あれ。少人の御事。我は出家。位も氏もけなげさも、よき主なれば頼むな

九條
牛若の宿所

さる程に
後醍醐天皇元弘
元年九月十三日

り。鹿忽にや思召すらん、さりながら、是又三世の奇縁の始め、今より後は主従ぞと、契約堅く申しつゝ、薄衣かづかせ奉り、辨慶も長刀打ちかついで、九條の御所へぞ参りける。(観世流謡曲)

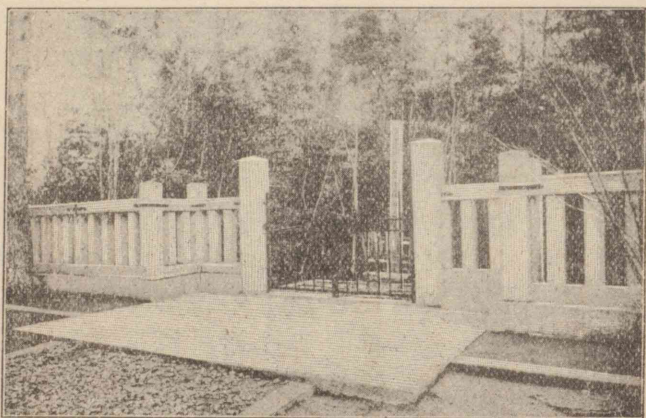
二五 松の下露

さる程に、類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始め参らせて、宮々卿相雲客みな徒跣なる體にて、何處を指すともなく、足に任せて落ち行きたまふ。此の人々、始め一二町が程こそ主上を扶け参らせて前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第にわかれくになりて、後には只藤房季房二人より外は主上の

十善

不殺生
不偷盜
不邪淫
不妄語
不惡口
不綺語
不憍語
不嗔語
不貪食
不見悲

赤坂
河内國南河内郡
赤坂村大字水分
に城址がある



笠置山行宮遺址

御手を引き参らする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫

野人の形に變へさせたまひて、そことも知らず迷ひいでさせたまひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせたまはぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心ちして、一足には休み、二足には立止り、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隠させたまひて寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせたまひて羅穀の御袖

有王山
山城國綴喜郡に
ある

をほしあへず。とかうして夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせたまひけり。藤房も季房も三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなるめにあふとも逃れぬべき心ちせざりければ、せん方なくて幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に現の夢に臥したまふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと思召されて木のかげに立寄せたまひたれば、下露のはら／＼と御袖にかゝりけるを主上御覽ぜられて、

さして行く笠置の山を出でしより

あめが下には隠れがもなし。

藤房卿涙を抑へて、

いかにせん、頼むかけとて立寄れば、

なほ袖ぬらす松のしたつゆ。

山城の國の住人深須入道松井藏人二人、此の邊の案内者なりければ、山々峯々残る所なく搜しける間、皇居隠れなく尋ねいだされたまふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、汝ら心あるものならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ。と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれ此の君を隠し奉つて義兵を擧げばや。と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事をはかりてもだしけるこそうたてけれ。俄の事にて綱代の輿だになければ、張輿の怪しげなるに扶け載せ參らせてまづ南都の内山へ入れ奉る。其の體、只殷湯、夏臺に囚はれ、越王、會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。之を見る人ごとに、袖をぬらさずといふことなかり

内山
大和國山邊郡朝
和村柚之内永久
寺
殷湯
夏臺の桀王が湯を
夏臺に囚へたの
夏臺は夏の代の
獄の名
越王
越王句踐が吳王
會稽山で降る

けり。

兩大將
大佛貞金
金澤貞將

持明院新帝
光嚴天皇

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞二千餘騎にて路を警固
仕りて主上を宇治の平等院へ成し奉る。其の日、關東の兩大將、
京に入らずしてすぐに宇治へ参り向うて龍顔に謁し奉り、まづ
三種の神器を渡したまはつて持明院新帝へ参らすべき由を奏
聞す。主上藤房を以て仰せ出されけるは、三種の神器は古より
繼體の君位を天に受けさせ給ふ時自らこれを授け奉るものな
り。四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を掌に握るものあり
といへども、未だその三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉
る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に捨て置き奉り
しかば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は
山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾が國の

内侍所
八咫鏡

守とならせたまはぬことあらじ。寶劍は武家の輩もし天罰を
顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏
させたまはんずるために、暫くも御身を放たるゝことあるまじ
きなり。」と仰せられければ、東使兩人も六波羅も辭なくして退出
す。

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し参らせんとしけるを、前々臨
幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を強ひて仰出されける間、
力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に逗
留あつてぞ六波羅へは入らせたまひける。日來の行幸に事か
はりて鳳輦は數萬の武士に打圍まれ、月卿雲容はあやしげなる
籠輿傳馬に扶け載せられて、七條を東へ、河原を上りに、六波羅へ
と急がせたまへば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲し

天上の五衰

諸天命欲終時
五死相現

一華冠萎

二腋下汗出

三龜來著身

四見更更有天

坐已坐處

五自不樂本

座

人間の一炊

邯鄲の邸舎で黄

梁を炊ぐ間に盧

生が見た富貴五

十年の夢

中宮

藤原禧子

太政大臣藤原實

兼の女

四つの緒

琵琶

いかな、昨日は紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の装をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせたまひて、萬卒守禦の嚴しきに御心を悩まさる。時移り事去り、樂み盡きて哀み來る、天上の五衰、人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思しめし出す御事多きをりふし、時雨の雨一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して、

住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ、

音をきくにも袖はぬれけり。

四五日ありて中宮の御方より御琵琶を遣はさるゝに御文あり、御覽ずれば、

思ひやれ、塵のみつもる四つの緒に

はらひもあへずかゝる涙を。

引返して御返事ありけるに、

涙ゆゑ半ばの月はくもるとも、

ともにみし夜の影は忘れじ。(太平記)

藤田東湖

名は彪

水戸藩士

勤王家

安政二年(五三)馬

卒

年五十

慎中

弘化四年から嘉

永五年まで水戸

に謹慎を命ぜら

れた

二六 人の問に答ふ

藤田東湖

一兩年以來十數度の貴翰、尙又時々御惠投ものに預り、殊に當春梅花の御贈もの等、實以て御厚意淺からず。僕が頑鈍狂愚、何故、右様御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顔の至に御座候。

さて慎中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脱し候上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境

界、實以て寸暇もこれなく、尤も日々夕刻大白を傾け候暇はこれあり候へども、其の外はとかく閑隙を得ず、今日始めて貴答に及び候。



藤 田 東 湖

一、先年弘道館にて貴兄御面貌はたしかに相覺え候。謂はゆる嶄然頭角、今以て心目に宛然に御座候處、追御詩文等拜見、尙又御尊承知致候へば、近年益、御研

精の由、憚ながら感心仕候。老人くさき申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家は悉く澤山に相成候へども、眞實の學者は寥々に御座候間、國家のため御勵精尤に存候。僕な

弘道館
水戸藩の學校
天保十三年徳川
齊昭これを開く

弘道館記
徳川齊昭の撰し
且書いたもの

どは罪名載せて幕府の籍にある身分にて、天地の一棄人に候間、理窟がましきことは一切申すまじと心がけ候へども、大義未だ曾て君臣を忘れざる至情もだし難く、且は度々の御細書御深意をも推察致し、旁、心事ほゞ吐露仕候

申すまではこれなく候へども、學問は實學にこれなくては、却て無學にも劣り申候。弘道館記中に、忠孝無二、文武不歧、學問事業、不殊其效、と遊ばされ候儀、實に學者立志の模範、志士報國の根本に御座候はんか。今世、親孝行の様なれども、御奉公は出來ぬ風の人も相見え、又御奉公出來候様にても、父子の中とくと致さざる向も相見え候。これら決して聖人の道にあらざと存候。又少々書を読み候へば、何か仔細らしき顔色を致し、言語等漢文交りにてしやらくさく候へども、劔槍等の藝一

忠 = 當
心 = 孝

白波の師 (盜賊)

み
おのル
すてに、ナカ
ハ下ニワキニケリ
ハミナツキテ
イ、己、己、己
イ、モ、シ、と、見、よ、む

切出來申さず、文弱白面の書生と相成候儀毛唐人ならばそれにて宜しきかも相知らず候へども、かりそめにも神州尙武の域に生れ、且は武家の飯を食ひ候者は右様白面の書生は風上へも置きかね候事勿論に御座候。武人の愚にも困り候へども、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生にはまさり申すべきか、しかし成るべきだけは、文武歧れず兼備これありたき事、是亦勿論に御座候。
學問事業その效を殊にせざるに至り候うては、なか／＼難物なり。僕が輩頌白に相成候へども、今以て學問事業一致の場合に相成申さず、及ばずながら心を用ひ居る事に候。修己治人の工夫、明倫正名の講究、時々刻々離れ申さず候はゞ、貴兄などは妙齡の御事ゆゑ、必ず學問事業の一致も御出來なされ候

はん。隨分御研精御尤に御座候。

一、讀書は博きを貴び候へども、うはすべりいたし候うては、萬卷の書を読み候とても、用をなしかね候はんか。古人の謂はゆる「眼光紙背に透る」と申すごとく讀みたき事に御座候。次第次第に後の世に生れ候ほど、讀書多く相成申候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す様に相成、末が末に相成候はゞ、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存候。人の持前種々これあり候故、一概には申兼候へども、歴史等も唯ばつと讀み候よりは、何か一つ講究著述致す心得にて讀み候方、格別に益を得候様相覺え申候。制度の事も、文辭の事も、名君賢相の行狀其の外一々記憶致すべし

十七史
前史記
後漢書
三國志
晉書
宋書
南齊書
梁書
陳書
北齊書
周書
隋書
南史
北史
五代史
二十一史
宋史
遼史
金史
元史
を加ふ

二六 人の問に答ふ

一五

己、己、己

東坡

某讀漢書一至
是凡三經三手鈔
矣、初則一段事
鈔三字、爲一題、
次則兩字、今則
一字。(東坡外傳)

李太白長語
七言古詩惟子美
不_レ失_二初唐氣格_一
而縱橫有_レ之、太
白縱橫往々驅弩
之末、間雜長語、
英雄欺人耳。
(唐詩選序)

天地正大、子將此鍾、神女秀内
不二藏鏡、導千秋注、大瀛水
洋、環洲發、萬葉、櫻泉芳
粧、倚清、百鍊鐵、銳利、刺登
蓋臣、皆能、去夫、盡好仇、神女
孰、天法、稱、有、天皇、風、冷、
合、明、德、伴、左、陽、不、世、言、汗、隆、正
氣、時、吐、走、乃、參、大、連、藏、候、排、置、
乃、助、明、主、斷、談、焚、伽、藍、中、即
嘗、用、之、宗、社、監、石、也、清、丸、嘗、用
、妖、僧、肝、膽、寒、血、揮、龍、口、劍、虜、使
頭、臣、分、勿、起、西、州、颯、然、清、藏、妖
氣、志、賀、日、明、夜、陽、爲、風、聲、地、若
野、戰、翻、日、又、代、帝、子、走、或、枝、錄
倉、屋、履、快、心、慎、或、伴、櫻、井、驛
遺、言、何、能、爲、或、守、伏、見、城、一、身
當、萬、軍、或、狗、天、同、山、坐、回、不、忘
矣、升、平、二、百、載、斯、事、半、日、伸、然、焉

和 文 天 祥 正 氣 歌

と存候うては、大抵の人にては
中々覺え兼申候。東坡が漢書
を讀み候法など面白く御座候。
尙又御勘考御尤に存候。
一、文章は末藝に候へども、自分
にて文を書き候位にこれなく
候うては、經書も歴史も本當に
解し申されず候。間、隨分御餘力
には御修行御尤に存候。但し
近來、長短句にてごまかし候詩
流行致候處、唐詩選の序にも、李
太白長語を用ひ候事を評して、

東夷の人

日本國夷人物茂
卿拜手稽首敬題
替孔子真(徂徠
集)

其得屈生四十七人乃古之羅亡
英雄未嘗浪長在天、故有_レ此_レ取
、最、倫、孰、能、扶、也、卓、立、集、傳、原
出、誠、尊、皇、室、孝、敬、事、天、神
脩、文、兼、奮、武、誓、以、清、廟、庶、一、朝
天、步、形、和、天、身、先、洵、頑、鉄、之、也、
罪、戾、及、如、之、、困、苦、萬、天、究
向、誰、陳、孤、子、遠、埃、墓、何、以、報、先、親
昔、再、二、周、皇、獨、有、斯、氣、隨、送、予
難、弟、死、豈、忍、与、汝、終、屈、仲、付、天
地、生、死、又、何、能、生、南、守、天、究、
張、四、維、死、爲、忠、義、鬼、極、天、護
皇、基

弘化乙巳仲冬、竟于北總、著
飾、神、山、松、村、尚、み
常陸、藤、虎

(書 並 賦 湖 東 田 藤)

「英雄人を欺くのみ」と申候。今
の流行は凡庸人を欺くとも申
すべく候。右の類は先々御稽
古これなき方と存候。
一、慶元以來、人物林の如く、豪傑
も追々に出で候處、其の中にて、
仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の
經濟、新井の敏捷など、皆畏るべ
く存候。しかし右の内、徂徠は
更に名分を存ぜず、自ら東夷の
人と稱し候儀、不届至極に御座
候。新井も才氣絶倫に候へど

司馬溫公

北宋の司馬光
字は君實諡して
溫公といふ

朱文公

南宋の朱熹
字は元晦
諡して文公とい
ふ

韓魏公

北宋の韓琦
字は稚圭
魏國公に封ぜら
れた

も東都を張り立て候志は悪むべく候。さ候へば今に在つては右數子の長を取り短を捨て實學講究致し孔子の遺意に適ひ候様御同意企望致したき事に御座候。今世の儒者やゝもすれば唐人の事は丁寧に申し司馬溫公朱文公韓魏公などと稱へさて新田義貞が云々楠木正成が云々など申候類甚だ相濟まず。右様の人をば僕は毎々和唐人と唱へ申候御一笑下さるべく候。その外當世の學風其の弊少からず候へども、拙も書中に盡しかね候故まづその一端を挙げ候のみに御座候。僕は最早貴地などへ出て候事は終身これなく候間拜面もむづかしく候處貴兄は御墓參御對面等にて御歸郷も御自由ゆゑもし來春など一寸も御歸郷に相成候はゞ種々存候だけの事は御切磋商申すべく候。

切磋商申すべく候

先は今日は前文御申譯かたぐ一書を裁し候事に御座候。しかしながら御覽の通り亂筆さぞ御讀みかねなされ候はんと閣筆致候。以上。(寺門誠所藏文書)

二七 國ざかひ

雪のこる頂ひとつ國ざかひ
地に落ちし葵踏みゆく祭かな
朝鳥の來れば嬉しき日和かな
静けさに礫うちけり秋の水
獨言ぬるき湯婆をかへけり
夕月や納屋も既も梅のかげ
正岡子規
内藤鳴雪

正岡子規

名は常規

俳人

歌人

伊豫松山生

明治三十五年歿

年三十六

内藤鳴雪

名は素行

俳人

漢學者

弘化四年(二五七)

伊豫松山生

高濱虛子
名は清
俳人
小説家
明治七年伊豫松
山生

矢車に朝風つよき幟かな
元日や一系の天子富士の山
大佛に雪のなだるゝ朝日かな
音立て、春の潮の流れけり
金龜子なげうつ闇の深さかな
部屋々々にくぼる行燈や鹿の聲
遠山に日の當りたる枯野かな

高濱虚子

坪内逍遙

名は雄藏
英文學者
戯曲作家
文學博士
早稻田大學名譽
教授
安政六年(三五九)
美濃國太田村の
尾張代官所生

二六 長柄堤の訣別

坪内逍遙

檠まはたを食ふことは難しと雖も、未だ如かず、生きて別るゝことの
難かるには、苦きことは心肝にあり。晨鷄再び鳴いて残月

長柄堤
攝津國西成郡豐
崎村あたりの長
柄川の堤

茨木
攝津國三島郡茨
木町

薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲や、残
んの星を一つづつ鐘が消しゆくいなゆのめの長柄堤に秋闌け
て、一村蘆に風黒く、有明妻き大川水、逝ゆのめきて歸らぬ波の音、狹霧
に咽び白けゆく千草が蔭の蟲の聲、哀はいとゞまさるらん。
片桐市正且元は居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、邸
を立つて大阪城をあとになし、列を正してしづくと長柄堤
に差懸る。其の時市正手綱をひかへ、從兵を先へ進ませ、弟主
膳正を呼び近づけ、あらためていひけるやう、
市いかに弟、我昨日討手を待受け、自殺せんと覺悟なりしに伊豆
守が殘兵ぬけがけなし、討手の荒膽あらいだんを挫くぎしたため、備ありと見違
へしか、また寄せ來らん模様もなく、剩へ夜に入りては、外に在り
し家臣まで、變を聞きつけ馳せ來り、血氣のともがらこれに氣を

織田入道
織田信雄常眞入道

得て、薪に油を濺げる如く、弓鐵砲とひしめき騒ぎ、命を聽かばこそ、打棄ておかば、珍事に及ばんも圖りがたく、暫く彼等をなだめん爲、一先茨木へ引退き、後事を圖らんといいしものゝ、昨夜仄かに傳へ聞けば、織田入道も君を見限り、俄に京表へ退去の由、お家の危機いよゝ追んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に至らん事必定なり。それにつき所存あつて、先刻今村三右衛門を木村が邸へ走らせたり。追付け三右が吉左よしひだりあらん。我はこれにて相俟つべし。御身は暫く我に代り、手勢を差配し、途中に不慮の間違なきやう、一足先へ參らるべし。

主「あの足音は、たしかに今村。」市「三右衛門か。」今「我が君これに御座ありしか、長門さまには追付けこれへ。」市「ほゝ、太儀々々、滿

足なるぞよ。しからは主膳は一足先へ。三右衛門もこゝかまはず、我はこれにて相俟つべし。」主「仰ではござりますれど、油斷ならざる當節柄、如何なる變事あらんも知れず。」今「只御一人此

の處に、御座あらんは心元なし。」

評 主「せめて我々。」二人「兩人は、」

内 市「はて入らぬ遠慮。氣づかひ

道 致すな。往け。」主「ぢやと申

遊 して。」市「はて往けと申すに。」

二人「はゝあ。」



顔見合せて是非なくも、主膳をさきに三右衛門、心残して行過ぐる。

後には何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤の有明がた、時

に囀る小鳥の聲、川霧やうく霧れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に一筋騰る朝煙、くたかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の空には似ぬや入る方の月すさまじき柳陰、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し、をちかたにおぼろおぼろとあらはるゝ名におほさかの四衢八街、悄然としてさびしげに一棟たかく聳えしは、

市おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かれし大阪城、故殿下薨れさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ、取分け加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬪げば、大政所の御方さへ當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有様。唇齒已に亡ぶ。今にもあれ事起ら

南山不落

如二月之恆、如三日之升、如南山之壽、不烈、不崩、(詩經)

唇齒 唇亡齒寒(左傳)

永

永

ば、金城湯池も其の甲斐なく。

いひかけて聲曇らせ、

市須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か、情なや、此の且元がする事爲す事いすかの嘴とくちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘廬舍那佛の御胸にも大慈大悲は宿らざるか。御家とこしなへに康かれと祝ひし文字が本となり、降つて涌いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること御運の末といひながら、

唄へず馬よりとびくんだり、彼方に向ひ平伏なし、

市是しかしながら不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循にして大事を誤り、空しく關東の罫に罹り、仰せつけられし御遺命に

須彌

梵語 妙高山と譯す、世界の中、心に聳ゆる、最高の山といふ

千姫

徳川秀忠の女、秀頼の室となる

前門の虎

前門拒虎、後門進狼(諺)

あひかた 暗

座ス

背き奉る今日の仕合せ不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば且元が此の腸はちぎらるゝばかり、償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫仕らん。御赦しなされて下さりませ。」
在すが如く両手をつき、人目なければ、やゝしばし不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市あゝ我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし。心許なき事どもぢやなあ。」

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音程もあらせず、只一騎残霧つんざき一散に汗馬に宙を走り來る木村長門守重成。

長市正殿に候な。市長門守殿待ちかねしぞ。
いふ間にかけて寄るくつわづら、右手におり立ち顔見合せ、言葉

社ノ神
移リ古ノ神

口ハニ影ニ空ニリ
以て人を養ふ

はなくてそゞろにもまづ袖濡るゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋の淋しさを長柄堤に留むらん。

長最早豊臣の御社稷も愈末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のそのひまに思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿、日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立て、只今退席ありしとばかり。あとは亂脈無法の評定、御母公の威を笠にきる大野、渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の櫛に手は懸けし

大野
修理亮治長
渡邊
内蔵介紀

が、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ふ甲斐なさ。」

悔むを且元押宥め、

申まをいしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢申し、如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とても此の度の一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴おろかの至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻やぶれ生ぜんこと治定なるに、昨日までは去就しやくしゆを定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂やぶれせんは目前なり。この上は只偏ひとへに籠城の計畫こそ肝要なれ。」長ながして籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」申まをされば、今御城に兵糧金銀は乏し

九度山
紀伊國伊都郡の山村
高野山の北麓
眞田安房守
名は幸昌



長柄堤の訣別

からず。まつた猛將勇卒にも事か、ねど、得難きは智謀の將なり。某之を慮り、萬一の備をなし置きたり。」長ながして其の智謀の將とは、申まをいま九度山くだやまに隠れ忍ぶ信州上田前の城主眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戰以來關東の跋扈を怒り、蟄ひそして世の態を窺ひ居るを先年御味方となし置いたり。事起らば上使

を以て急ぎ彼を招かるべし。合戦の進退は一切彼の人に任せられよ。其の他關ヶ原の一亂以後浪々なし、長曾我部盛親まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因みは附け置きたり。上御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。是第一の手配りなり。長して又籠城となつたる曉敵を防がん手配りは、市その儀も豫て地利を考へ、出丸なくしては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業の爲といつはり、紀伊川の川上より浪華津に押流させ、御船入に積み置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るといふとも、なほ支ふるに餘あるべし。長それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。市甲冑兵

政め又け守るるに、
其の地勢

速水 名は守久
御宿 名は正倫
和久 名は宗是
金石も亦透り
陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成。(朱熹)

具も乏しからず。長城は名に負ふ南山不落。市眞田後藤の智勇をもて、此の堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、長たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懐け、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、市中々三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。長まつた若年には候へども、愈軍始りなば、我亦一方を承り、速水御宿和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命は固より鴻毛の吹き翻さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし、利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべしや。この上は仰に従ひ、この事君に言上なし、直に軍の手配りせん。御心安かれ、市正どの。市ほ、頼し、く。只大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時に照し、

成行く末をかながみれば、長淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野渡邊、市上御發明に渡らせらるれど、長讒佞之を蔽ふが故、市地の利はあれども人の和なく、長故太閤が御威武に、をの、き震ひ打伏せし六十餘州の民草も、市天の時にや、大御所のおのづからなる徳風にいつしか靡く世の有様、長如何なれば、かくまでに御運かたぶく西天の、市有明の影薄れつ、長東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、市新日、東天に昇るといふ、長世の成行の、兩人影なるか。

是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺耳驚かす鐘の聲、夜はほのくと明けにけり。市正おもてを正し、
市万一にも其の期に至り、百計合期せずば、それまでなり。當來

市計を合を河事あり

市

を誰かは知らん。斃れて後已まんのみ。大丈夫、豈徒に杞憂せんや。後事を足下に託せし上はもはや思ひ残す事もなし。長して、そこもとはこれよりして、市居城茨木へ一まづ立越え、長といはるゝは請取りがたし。若しもやこれが今生の、市ああいや、いさぎよき最期をだに、遂ぐべき機会を失ひし市正が命の拙さ、御詫の名こそ立ため、償ひがたき身の大罪。此の身ひとつ兎や角と、千筋に迷ふ心のうち。いやなに心ばかりは此の後とても、君の御影につきそひまゐらせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなん其の時には、長それがしとても事敗れて、御運の末となるときは、此の世の思出、奉公をさめ、關東勢が真中に、縦横無盡の血戦なし、花々しく討死なさん。市おゝ勇まし、いさぎよし。それがし存へ、世にあらば、其の目ざましき働をば、餘所なが

白倉權六
大野修理亮の家
の子

十河
十河十兵衛
本村
本村清藏
共に片桐市正の
郎黨

ら見物なさん。尙再會は黄泉あもせにて。まづそれまでは長門どの。
長ながさやうござらば市正どの。」「市隨分堅固で。」「長ながそこもともにも。
惜しきが中の生別離、まことや之に比ぶれば、槩は蜜にや似た
るらん。右と左に立別れ、駒引寄せて色代いろしろや、悵然たる重成が、
乗移りざまふりかへる、堤下に一もとくねり松、あやしの人影、
さは曲者と見る間も疾しや打出す手裏劍てらばし。あつとたまぎる
聲諸共、ねらひはそれし種が島しま。どうと大地に白倉權六、白且
元覺悟。」「
と抜きうちの襟がみつかみ頭顛倒。音き、つけて物かけよ
り、驚きかけ來る十河本村。郎黨ども、見かへりもせず乗移る
秋さび月毛乗る人の心やいかに白駒の勇むを制するかた手
綱、引戻さるゝ後髮。史しひであつた。

兩人「さらば」さらば。」

と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろく。嘶く駒の
聲はして、別れゆく兩人が此の世に残す面影は、また見ぬ形と
ぞなりにける。

師範國文 第一部用卷三終

師範國文第一部用卷三

大正十四年十月二十七日印
 大正十四年十月三十日發
 大正十五年三月十日訂正再版印刷
 大正十五年三月十三日訂正再版發行

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢
金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢
金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢

編者 東京市小石川區高田老松町五十二番地
 吉田彌平

印刷者兼 東京市神田區通神保町六番地
 上原才一郎

發行所 東京市神田區通神保町六番地
 光風館書店



文部省檢定 師範學校國語教科書 大正十五年三月十七日

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
 賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

◎書用科教科語國行發館風光◎

東京高等師範學校教授 吉田彌平編

師範國文

中國文教科書

現代文新鈔

近世文新鈔

近古文新鈔

東京普通學校教授 文學博士 高野辰之編

國文讀本

國文讀本

東京高等師範學校教授 文學士 保科孝一編

國語教科書

大平記鈔本

平家物語鈔本

增鏡鈔本

第一部用全十册
二部用全一册

修正十七册

修正五册

修正五册

修正一册

修正二册

修正一册

修正一册

修正八册

修正五册

修正一册

修正一册

修正一册

保元平治物語鈔本

現代文璧

徒然草鈔本

常山紀談鈔本

義經記鈔

十六夜日記講本

花月草紙鈔

益軒文鈔

東京立教中學教授 諸星寅一編

徒然草讀本

神皇正統記鈔本

方丈記讀本

修正一册

修正二册

修正三册

修正一册

修正一册

修正一册

修正一册

修正一册

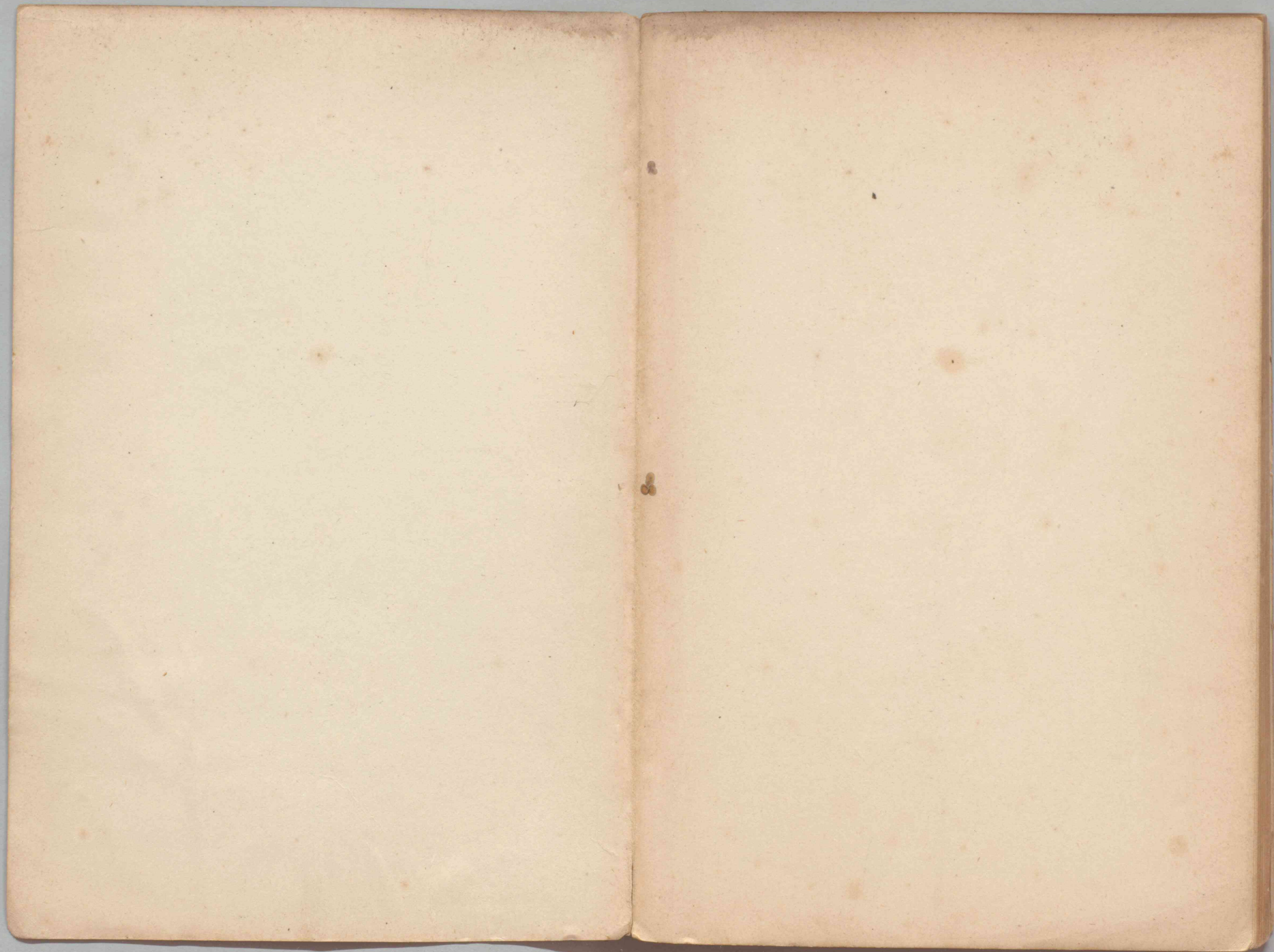
修正一册

修正一册

修正一册

修正一册

修正一册





広島大学図書

2000301854

